モイライ（MOIRAI）

〈登場人物〉

糸居依子（フジミ産婦人科の元婦長　75歳）
長沢計子（同じく元主任看護婦　69歳）
小田切雅美（同じく元副主任看護婦　67歳）
岡村透（リフォーム会社の営業　26歳）
阿部真理子（ホームヘルパー　53歳）
松本裕子（26歳）
女1（糸居と同じ役者が演じる）
女2（長沢と同じ役者が演じる）
女3（小田切と同じ役者が演じる）

1

舞台中央に篭。黒衣の女1、2、3が肩を組み、輪になってそのまわりを回る。ぶーんぶーんと糸繰車の管巻の音。

女1　くるくる回れ、糸繰車。願かけ唾つけ
　　縒りかけて、運命の糸を紡ごうよ。
三人　くるくる回れ、糸繰車。願かけ唾つけ
　　縒りかけて、運命の糸を紡ごうよ。

二度繰り返す。女1、篭からソフトボール大の赤い毛糸玉を取り出す。

女1　おお、何と元気な玉のような。
女2　計りましょ。計ってやりましょう。

女2、毛糸玉から毛糸を引き出し、物差しで計る。

女２　身長百七十二センチ。人差し指の長さ７センチ、鼻の下２センチの気の弱い男になるでしょう。寿命はちょうど五十二年。

女３　切りましょ。切ってやりましょう。

女３、鋏で毛糸を切る。

女３　あれ、しまった！　切りすぎた。

女２　おっちょこちょい。

女１　うっかりやさん。

女２　どれだけ切っちゃったの？

女３　半分に。

女２　じゃあ、身長が半分に？

女１　いいえ。

女３　人差し指が半分に？

女１　いいえ。

女２　鼻の下が半分に？

女１　いいえ、寿命が半分に。

女２　半分といえば二十六……。

暗転。

２

年数の経った戸建住宅の居間。下手側に台所。上手側に玄関。畳の部屋には卓袱台が置かれ、箪笥によりかかるように、糸居依子が足を投げ出して座っている。その傍らに長沢計子。

作業着姿の岡村透が台所の床下から現れる。床下にもぐって調査をしていたらしく、髪に蜘蛛の巣がついている。それを払ってやる長沢。

岡村　……あ、すみません。

長沢　どう？

岡村　やっぱり……ですねえ。

長沢　やっぱり、なの。

小田切雅美が台所からお茶を運んでくる。卓袱台に置く。

小田切　お茶、どうぞ。

岡村　あ、おかまいなく。

長沢　あら、お茶なんかより。

小田切　お茶じゃない方がよかった？

長沢　冷たいものの方が。

小田切　冷たいお茶？

長沢　お茶じゃなくて。

岡村　僕、お茶、好きですから。

小田切　熱いのがいいのよ、体にも。

長沢（小田切に）やっぱり、なんですって。

小田切　あら、やっぱりなの。

耳が遠い糸居、三人の会話が聞こえないのを気にしている。というか苛立っている。長沢が気づき、小田切の肘をつつく。以下、糸居にしゃべりかけるときは、誰もが自然と大きな声になる。

小田切（糸居の耳元で大声で）やっぱりなんですって。

糸居　……ああ、やっぱりなの。

岡村　震度５、いや震度４くらいでも危ないんじゃないかと。

小田切（長沢に）震度４なんて、最近なかった？

長沢　震度３ぐらいならあったと思うけど。震度４はないわよ。

小田切　あったわよ。私、覚えてる。ほら、ええと、そう、デコポン食べてたとき。

長沢　デコポン？

小田切　デコポンじゃなかったかしら。伊予柑だった？

長沢　大沢さんが送ってきたやつ？

小田切　それそれ。見かけばかりであまりおいしくないわねって。

長沢　大沢さん、八朔じゃなかった？

小田切　八朔だったかしら。ちょうどお昼の

テレビ見てたの。みのもんたが出てたんだけど、〝お嬢さん、今揺れてますね〟なんて言って。速報が出るでしょ、地震の。確か震度４だった。

長沢　震度４なら私だって覚えているわよ。だって、すごいのよ、震度４といったら。電気敷布の目盛りとは違うの。３と４では段違い。棚から物も落ちたりするし。（岡村に）ねえ。

岡村　はあ、かなりなものだと。

小田切　じゃあ、３だったのかしら。

長沢　３よ、３。

糸居、面白くない顔。

小田切（糸居の耳元で）震度４でも危ないんですって。

糸居　震度４なんて最近なかった？　ほら、この間、テレビで、みのもんたがデコポンが脳梗塞にいいとか、悪いとか言ってたら揺れたのよ。

小田切（糸居に）デコポンじゃないです。八朔なんです、大沢さんの。それ、震度３なんですって。

糸居　あら４よ、絶対。

小田切　棚から物が落ちました？

糸居　４は落ちるの？

小田切（岡村に）落ちるのよね。

岡村　はあ、まあ。

糸居　こちら、どなた？

小田切（糸居に）いやだ、もう忘れて。婦長さん、この人、岡村さん。お、か、む、ら、さん。アクロス、リゾートの。

岡村　アクロスリフォームです。

糸居　製薬会社の？

長沢　何で製薬会社のプロパーが来るのよ。病院じゃないんだから。リフォーム。おうちの修繕をしてくれる会社よ。

糸居　ああ、おうちのね。それで、どこのおうちを？

小田切　どこのって、ここに決まってるじゃないの。ここよ、私たちのおうち。

糸居　棚から物が落ちるから？

小田切　震度４になれば落ちるけど。

糸居　やっぱり４だったでしょ。

小田切　そうじゃなくて……。

長沢（糸居に）ですから、震度４になると、このうちは危ないんですって。

糸居　それで棚を直すの？

小田切　棚を直しても仕方ないでしょ。

糸居　物が落ちるんだから。

長沢　柱が折れて、壁にひびが入って、天井が落ちてくるの。おうちがペシャンコにつぶれちゃうの。

糸居　うちが？　このうちがつぶれるの？

長沢　この間の、みのもんたは４だったのよ。でも大丈夫だったわ。

ですから、この間のは震度３だったんです。棚から物は落ちなかったでしょ。

糸居　落ちたわよ、デコポンが。

小田切　婦長さん、大沢さんのは八朔。

糸居　だって、みのもんたが……。

小田切　大体、デコポンが脳梗塞にいいなんて、いいます？

糸居　お肌にはいいわ。

小田切　それもどうかしら。私たちいろんなところから柑橘類送ってもらうから、結構食べてるはずだけど、こんなじゃない。

小田切、腕を見せる。黒ずんでいる。

長沢（腕をまくり）私も……増えてきてる。

糸居　それ重傷だわ。震度４よ。

長沢　何言ってるのよ。

岡村　あの、震度４だから、必ず、その、つぶれるわけではないんです。あくまで可能性が、ということで。

長沢　可能性はあるわけよね。

岡村　はあ、可能性は。

小田切　震度５はともかく、震度４なんてそ

のうちに絶対あるわ。

長沢　あるわよ。（岡村に）ねえ。

岡村　僕には、それは、断言できませんが、たぶん……。

小田切（長沢に）ねえ、薬剤科にいた小金井さん。あれでしょ、阪神淡路の。

長沢　病院やめて実家に帰ったら、すぐあれなんだもの。ついてない人よね。

小田切　すぐってことないわ。帰って５、６年たってたわよ……彼女、何でやめたんだっけ？

長沢　お母さんの具合がよくないからとか言ってたけど。

小田切　けど？

長沢　山崎先生とのあれが、その、ほら、こじれて。

小田切　ああ、そういえば、一度奥さんがおしかけてきた。

糸居　何の話。

長沢　小金井さんの話ですよ。あの人、実家が淡路島だから。

糸居　それで八朔、送ってくれるの？

小田切　それは大沢さんですよ。薬剤師の小金井恵子さん。

糸居　知ってるわよ。内田先生といい仲だった人でしょ。

小田切　山崎先生ですよ。

長沢　地震でおうちが全壊したんです。

糸居　山崎先生のおうちが？

小田切　だから、小金井さんのご実家が。

糸居　震度４だったの？

岡村　阪神淡路はそんなもんじゃないです。確か、神戸や淡路は震度６。

小田切　６、６ですって！

長沢　６なんか来たら間違いなく？

岡村　ええ……まあ、そのときはこちらだけじゃないでしょうが。

長沢　そうよね、よそだって、ただじゃすまないわよね。うちだけじゃないわ。

糸居　誰が来るの？

小田切　６が来るんです。震度６の地震が。

糸居　いつ？

小田切　そんなのわかりませんよ。

長沢　ねえ、その地震、補強……。

岡村　耐震補強材です。ウルトラ・ユレナイーズ７改良型。

長沢　そのウルトラ７は、震度６でも平気ってことなんでしょ。

岡村　震度７を想定しているんですが、世の中に絶対ということはありませんから。

長沢　絶対に大丈夫とはいえない。

岡村　はあ。

長沢　……岡村さん、正直だわ。薬でもそうだけどね。効能書き通りに効く薬なんてないの。だから、絶対大丈夫ですなんてあなたが言ったら、私たち信用しないわ。（小田切に）ねえ。

小田切　そう。震度６とか７なんてのが来ちゃったら、そのときはあきらめるわよ。問題は４とか５。だって、そのくらいだと平気な家もあるわけでしょ。うちだけ倒れるなんて、そんなのくやしいじゃない。

長沢　危ない家、多いの？　この辺にも。

岡村　結構多いですね。

小田切　じゃあ、おたくは商売繁盛だ。

岡村　いえ、なかなか理解していただくのが難しくて。

糸居、不快な顔。

小田切（糸居に）岡村さんの会社で開発した補強材を使うとね、阪神淡路のときの震度６でも大丈夫なんだって。

糸居　岡村さん、社長さん？

岡村　いえ、ただの主任です。

小田切　あら、主任なんてすごいわ。（長沢を指し）こちらも主任だったのよ。私は副主任。

岡村　我々のは一番下っ端の位で。入ってすぐの新人でも主任なんです。

長沢　岡村さん、この仕事、長いの？
岡村　まだ、三か月ちょっとで。
小田切　成績はどう？
岡村　あまり……。
小田切　そうよね、押しが強い方じゃないみたいだから。
岡村　向いてないんじゃないかと……。
長沢　あら、いいのよ。強引な人が嫌いな客もいるもの。（小田切に）ねえ。
小田切　そうそう。いるわよ。私たちもそう。
糸居　何の話？
小田切（糸居の耳元で）婦長さん、岡村さんは主任さんなんですって。
糸居　あら、そう。もうベテランね。
岡村　あの、先ほどから婦長さんって。こちら、もしかして元看護婦さんですか？
小田切　そうよ、婦長だったの。（長沢に）今は何ていうの？　看護師だから。
長沢　師長でしょ。
小田切　変ね、師長なんて。市役所の市長さんみたいで。
長沢　看護師さーんなんて呼ばれてもねえ。
岡村　みなさんも？
小田切　そう。
岡村　ご姉妹（きょうだい）全員、看護婦さんなんですか？

長沢、小田切、笑う。

長沢　私たち、姉妹じゃないわよ。
小田切　表札見なかったの。
岡村　ご家族じゃないんですか？
長沢　元同僚。病院にいたときの。
岡村　看護婦仲間。
小田切　そう。この人が主任で私が副主任、そしてこちらが婦長さん。
糸居　何の話？
長沢　私たち、姉妹に見えたんだって。
糸居　いやだ、全然似てないわよ。
小田切　似るも似ないも、年寄りなんてどれ

もしわくちゃで見分けがつかないわよね。

岡村　いえ、そんな……。

長沢　岡村さん、この町の人？

岡村　……いえ。

長沢　じゃあ、フジミ産婦人科病院って知らないわね。結構大きな病院だったの。産婦人科の専門病院で二十床以上あるってのは大きい方なの。

岡村　フジミ……。

小田切　そこにいたの、私たち。

長沢　今はもうないけど。

岡村　じゃあ、この家は……。

長沢　三人の共同名義。

岡村　三人でずっと……。

長沢　嫁かず後家の三人衆よ。

小田切　あら、私は一度いったわよ。

長沢　一年持たなかったくせに。

糸居　何の話。

長沢　副主任の連れ合いの話。

糸居　ああ、あれはろくなもんじゃなかった。

小田切　余計なお世話です。

長沢　岡村さん、結婚は？

岡村　とんでもない。まだまだです。

小田切　若いものねえ、二十三、四？

岡村　いえ、六です。

糸居　震度６？

小田切　歳ですよ、二十六。

糸居　誰が？

小田切　岡村さんにきまってるでしょ。

長沢　お相手、いないの。

岡村　稼ぎ、少ないですから。

小田切　看護婦はやめなさいよ。

岡村　そうなんですか。やさしそうだし。僕の先輩で、交通事故で入院した先の看護婦さんとつきあって結婚した人がいます。

小田切　それはね、ひっかかったのよ。その先輩、お金持ちでしょ。

岡村　お店、やってましたけど。

長沢　看護婦がやさしいなんてのは嘘。やさしくするにはそれなりの理由があるの。ホ

ステスと一緒。

岡村　そうなんですか。

小田切　だって、勤務時間は不規則だし、医者は威張ってるし、患者はわがままだし、給料だって仕事がきついわりにはたいしたことないし。そんなところで、いつもいつもやさしくなんてしてられないわよ。

長沢　そうそう。

糸居　何の話？

小田切　看護婦なんてやさしくないって話。

糸居　ああ、ろくなもんじゃない。

岡村　イメージ狂うなあ。

長沢　それに私たちのいた病院には、男性の患者がいなかったでしょ。

岡村　産婦人科ですもんね。

小田切　見舞いにくるのは旦那でしょ。いい男がいたってどうしようもない。

長沢　産婦人科の看護婦が一番やさしくないわね、きっと。

小田切　あなたの先輩だって、たいした怪我じゃなかったんでしょ。せいぜい骨を折ったくらいの。

岡村　ええ、足を。整形外科だったかな。

長沢　あそこはいいわ。生き死にが滅多にないから。

小田切　足が動かないくらいで、ほかはいたって健康。若くて元気いっぱいで。

長沢　そのうえお金持ちとくれば。

小田切　最高の患者よ。どんなサービスだってしてあげるわよ、ねえ。

長沢　いやだ、何、それ（笑）。

小田切　それに比べ、妊婦なんて最低最悪の患者よ。初めての人は情緒不安定になるし、泣くわ喚くは暴れるわってもう修羅場。それが二度目、三度目になると、今度は図々しいというか。

長沢　恥じらいはないし、遠慮はないし、汚いし。

小田切　まあ、あんなものひりだすんだもの。

長沢　ひりだすなんて、よしなさいよ、若い

人の前で。

糸居　何よ、何の話？

小田切　妊婦なんて最悪って話。

糸居　ああ、ろくでもないわ。

小田切　私ね、今でも忘れない。いたでしょ、ほら、うちの病院で六人産んだ女が。

長沢　ああ、あれ。名前忘れたけど。

小田切　もう慣れたもんなんだから、自宅の風呂場で産めばいいのよ。

長沢　あの人、やたら時間かかるのよ。難産というほどじゃなかったけど。

小田切　そりゃ、何人産もうと勝手だけどさ。常連面して、大部屋じゃもう牢名主よ。初めての妊婦さんなんておびえてたわ。

長沢　旦那は貧相な男だったわね。

小田切　子作りだけが取り得の。ネズミみたいな顔して。

長沢　ネズミは子沢山（笑）。

糸居　何の話よ？

小田切　うちの病院で、六人も産んだ女の話ですよ。

糸居　何を産んだの？

小田切　子供に決まってるでしょ。

糸居　死んだの？

長沢　死にはしませんよ。産んだの、六人。

糸居　震度６？

小田切（無視して）私、忘れないの。何十年も昔のことだけど。いまだに覚えてる。あの女、陣痛が始まってもなかなか生まれなくてね。ひいひい呻いてた。そんなとき付き添ってる看護婦なら誰でも言うじゃない。「頑張って、大丈夫ですよ」って。そうしたら、あの女、何て言ったと思う。「大丈夫だって？　結婚も出来ずに、子供の一人も産んだことがないおまえなんかに、この苦しさがわかるもんか！」……確かに、私は結婚もしてなかったし、子供も産んだことはないわ。でもね、いくらつらいからって、言っていいことと悪いことはある。結婚出来ない？　あんな貧相な、みっとも

ない亭主と一緒になるくらいだったら、しない方がいいわ。子供をたくさん産んだら偉いの？　生めよ殖やせの戦時中じゃあるまいし。避妊に手を抜いて、できちゃっただけじゃない。要するにだらしないのよ。生活に余裕があるなら、いくらでも産めばいい。十人でも二十人でも。でもね、私、知ってるけど、あいつら、福祉からずいぶん補助してもらってたのよ。それ、税金よ、私たちの。それで子供つくって、偉そうにするんじゃないっていうのよ！

長沢　血圧あがるわよ……岡村さん、びっくりしてるじゃない。

小田切（岡村に）ごめんなさいね。昨日の夕食の献立も忘れるのに、昔のことはやけに覚えているの。執念深いのかしら。

岡村　……七人目は、なかったんですか？

小田切　えっ？

岡村　六人で終りだったんですか、その人？

小田切　私は六人だと思ったけど。（長沢に）そうよね？

長沢　あれ？　七人かな。いいじゃない、同じようなものよ、六も七も。震度じゃないんだから（笑）。

小田切　六人よ。あれ、見ればわかるわ。

長沢　いいわよ、そんなことしないで。

小田切　だって気になるし。

岡村　六人は全員女ですか？

小田切　どうして？

岡村　どうしても男の跡継ぎがほしくて、頑張る人がいるじゃないですか。

長沢　昔はいたけどね。

小田切　思い出した。六人はみんな女。

岡村　そうですか。

長沢　そうだっけ。

小田切　じゃあ、六人じゃないわ。七人よ。七人目が、確か、あれだったから。

長沢　もういいわよ。その話、やめましょ。

糸居　何の話？

小田切　七人目でやっと男の子ができた人の

話です。

糸居　じゃあ、大家族の番組に出られるじゃない、みのもんたの。

長沢　みのもんた、そんな番組やってました？

岡村　七人ぐらいじゃダメですよ。

糸居　ダメなの。

岡村　七人じゃ無理らしいです。最低九人はいないと。

小田切　そうなの。

岡村　それに何か特徴がないと。

小田切　人数だけじゃダメなの。

岡村　両親のどちらかが欠けてるとか、病気とか。双子や三つ子が混じってるとか、プラスアルファがないとテレビ局でも採用してくれないみたいです。

長沢　プラスアルファねえ。

小田切　岡村さん、やけに大家族番組に詳しいわね。

岡村　知り合いにそういうのが……。

小田切　すごいんでしょ、一度放送すると。全国からプレゼントが。

長沢　そうなの？

小田切　そうよ、量が多いんで洗濯機がすぐ壊れるなんていうと、局に洗濯機が何台も届くんだって。自転車に交替で乗ってるっていうと、今度は自転車が届くの。中古じゃないわよ、新品が。洋服、食品に文房具、現金もくるらしいわ。テレビの威力はすごいのよ。

糸居　何の話？

小田切　洗濯機を送ってくれるんですって。

糸居　あら、うちもほしいわ。最近調子悪いんでしょ。

小田切　大家族でないとダメなんです。

糸居　あら、そう。つまらない。

長沢　世の中奇特な人が多いのね。お金持ちが多いってことかしら。

小田切　少ない年金の中から送ってくるような年寄りもいるらしいわ。ちょっとしたテ

レビ長者よ。だから段々贅沢になってね。お古の服なんて送ってくると、そのまま捨てちゃうんだって。

長沢　まあ、いい気になって！

小田切　そうだ、婦長さん。

糸居　何よ。

小田切　婦長さん、八人兄弟だとかいわなかった？

糸居　そうよ、私は下から三番目。男が五人に女が三人。そのうち総領と二番目は戦死、一番上の姉は空襲。三男は結核、二番目の姉は脳出血で若い頃に死んで、妹と弟が残ってるけど、弟は膀胱癌だし、妹は呆けてきたし。

長沢　婦長さんだけが長生き。

糸居　冗談じゃないわ。

小田切　昔は七人や八人、普通だったのね。

長沢　乳幼児の死亡率も高かったし……いやだ、何でこんな話になっちゃうの。岡村さん、ごめんなさいね。

岡村　いえ。

長沢　地震の補強の、ウルトラってやつをね、つけてもらわなきゃねえ。（小田切に）つけてもらうのよね。

小田切　私はいいわよ。

長沢　婦長さん、いいですよね？

糸居　何が？

長沢　ですから、岡村さんにお願いして。

糸居　何を？

小田切　６でも平気なように、うちを修繕してもらうんです。

糸居　６人じゃ、番組に出れないんでしょ。

小田切　震度です、地震の。

糸居　ああ、そう。

長沢　問題は費用よね。

小田切　そのウルトラ、おいくらなの？

岡村　ワンセット、定価は十二万円なんですが……。

小田切　十二万円！

岡村　設置費込みで十万までは何とか。

小田切　それでも十万。

長沢　安いじゃない。十万で震度６よ。それで枕を高くして寝られるんだから。

小田切　そうよねえ。

岡村　あの……それはワンセットの値段なんで。ワンセットだけで、この家をすべてカバーするというのは。

長沢　一つじゃダメなの。いくつ必要なの？

岡村（おずおずと）こちらでしたら、最低二十は。

小田切　二十？　二十セット！

長沢　二十セットということは……。

小田切　百万。

長沢　二百万よ。

小田切　二百万！

長沢　それで最低なのね。

岡村　あの、十セットでも何とか……。

長沢　何とか？

岡村　寝室だけにするとか。

小田切　居間やお台所が使えなくなっちゃったらどうしようもないわよ。

長沢　最低二十ということは、よそではどうなの？

岡村　こちらくらいの規模でしたら、二十五から三十が普通。

小田切　最低でもいいわ。でも最低でも二百万円なのよねえ。

長沢　うーん。

小田切　ねえ、ここを斡旋した不動産屋。あそこに少し負担させましょうよ。だって、震度４や５くらいでつぶれる家なんて、欠陥住宅じゃないの。

長沢　そんなことできるの？

小田切　せめて半分を。

岡村　難しいと思いますよ。

長沢　難しいわよ、そんなの。

小田切　二百万はたいへんよ。

岡村　あの、分割もありますが。

長沢　分割もあるの？

小田切　月々２万円くらいにならないかしら。

長沢　十年間も払うの？

岡村　それは……十回払いくらいなら。

小田切　月二十万ねえ。どうする？

長沢　命には換えられないけど。

小田切　そう長い命でもないけど。

長沢　家がつぶれて死ぬのはいやよね。

小田切　あっという間に逝けちゃえばいいんだけど、中途半端に大怪我して痛い思いするのはいやだし。

長沢　小金井さんのお母さん、箪笥が飛んできて肋骨折ったのよ。半年も入院して。

小田切　ああ、いやだ。

長沢　どうする？

小田切　どうしましょう。

長沢（糸居に）　婦長さん、どうします？

糸居　何が？

長沢　二百万いるんです。

糸居　いくら？

小田切　二百万円。

糸居　ああ、そう。

長沢　いいんですか？

小田切　わかってないわよ。

長沢　二百万円ですよ。

小田切　二百円じゃないんですよ。

糸居　馬鹿にしないで！　二百万でしょ。命に換えられないわよ。そんなに長い命じゃないけど。

長沢　婦長さんがそういうなら……いくらずつにする？

小田切　そうねえ。

糸居　月賦はだめよ。私、借金、嫌いなの。もう、いつ死ぬかわからないんだから。借金残して死んだなんて言われるのはいや。あるでしょ、二百万くらい。

長沢　ありますけど。

岡村　あの……もし一括でしたら、百八十まで何とか。

小田切　もう一声！

長沢　よしなさいよ。岡村さん、無理してるのよ。そうでしょ？　いい人なんだから、

つけ込んじゃ悪いわ……百八十でいい？

岡村　はい。

長沢　婦長さん、百八十にして下さるって。

糸居　じゃあ、すぐ行かなきゃ。銀行、三時よ。岡村さんの気の変わらないうちに。

岡村　そんなにすぐでなくても。

小田切　いいのよ、銀行に置いても金利もつかないんだから。

長沢　いいけど、百八十万なんて大金、私一人でおろしてくるの怖いわ。ひったくられでもしたらたいへん。

小田切　一緒に行くわよ、私も。

長沢（時計を見て）そうね……あ、忘れてた。今日は阿部さんが来る日よ。

小田切　あらら。

長沢　二人で出ちゃうと……。

小田切　じゃあ、岡村さんに。

長沢　いいですか？

岡村　お留守番ですか。

長沢　頼める？

岡村　いいですけど。銀行なら僕が車で一緒に行きましょうか？

長沢　すぐ近くなの。それに駐車場ないし。

小田切　婦長さん、耳が、あれでしょ。足もほとんど。だから、お客さんが来てもダメなの。

岡村　どなたか見えられるんですか？

長沢　ホームヘルパーが来るの。

岡村　ヘルパーさん。

長沢　阿部っていう女の人。（小田切に）あの人、いくつぐらい？

小田切　五十代前半じゃない。

長沢　その人が台所のことをやってくれるのよ。岡村さんは、玄関のドアだけ開けてくれればいいから。

岡村　わかりました。

小田切（糸居に）婦長さん、行ってきますから。

糸居　どこへ？

小田切　銀行ですよ。

糸居　ああ、そう。
長沢　岡村さん、お願いします。
岡村　いってらっしゃい。
小田切　すぐ戻りますから。

小田切、長沢、出て行く。
岡村、糸居と二人きりになるが、何とも落ち着かない。糸居の方も落ち着かないようす。盛んに湯飲みを口に持っていくが、中は空のようである。

岡村　あの。

糸居、聞こえていない。

岡村（大きな声で）婦長さん。
糸居　はい、何？
岡村　お茶をいれましょうか。それもう……。
糸居　あら、気がつかないで。

糸居、立ち上がろうとするが、足元が覚束ない。岡村、押し止めて。

岡村　婦長さん、僕がやります。
糸居　悪いわね、お客様に。
岡村　いえ、婦長さんの方がお客様ですから。

岡村、糸居にお茶をいれてやる。

糸居　面倒でしょ、大きな声出すの。
岡村　いえ。
糸居　私に子供がいたら、岡村さんくらいの孫もいたのよね。
岡村　……そうですね。
糸居　兄弟の子供たち、甥っ子や姪っ子ね、みんな、揃いも揃って出来の悪い金食い虫ばっかりで、それが喧嘩ばかりしていて、ああ、私、子供なんかなくてよかった、気楽だわって思ってたけど、孫はいいのよね。正直、羨ましいの。でも子供がいなくちゃ、

孫はできないもんね（笑）。

岡村　はあ。

糸居　ご兄弟、多いの？

岡村　ええ、まあ。末っ子ですから、僕にも甥や姪がたくさんいます。

糸居　継っ子なの？

岡村　いえ、末っ子なんで。

糸居　苦労したのね。

岡村　婦長さんは、なぜ結婚されなかったんですか？

糸居　……。

岡村　すみません、余計なこと。

糸居　これでも何度か話はあったんだけど、私、親に仕送りしなきゃならなかったの。病気がちだったし、妹や弟もいたし。ほら、看護婦って、女の仕事にしてはそれなりに稼げるから。頼られちゃってね。そうしてるうちに、声もかからなくなって。

岡村　婦長さん、ご苦労されたんですね。

糸居　岡村さん、その、婦長さんっての。

岡村　まずいですか？　何てお呼びしたら？

糸居　糸居です。糸居依子。

糸居、むせる。苦しそう。岡村、あわてて背中をさする。

岡村　大丈夫ですか？

糸居　ありがとう。

糸居、お茶を飲む。

糸居　私ね、私、部屋の中で赤の他人の男の人と二人きりになったの、初めてなのよ。

岡村　……。

糸居　七十五にもなって、笑っちゃうわね。

チャイムの音。玄関に急ぐ岡村。

岡村　はーい。

ドアを開ける。阿部真理子がいる。

阿部　四葉クローバーセンターから派遣されましたヘルパーの阿部と申します……ご親戚の方？

岡村　いえ、僕、留守番を頼まれまして……ええと、あの、主任さんと副主任さんは銀行へ行かれまして。

阿部　主任と副主任？

岡村　ですから看護婦の、こちらの糸居さんが婦長さんで。

阿部　ああ、小田切さんと長沢さんのことね。看護婦やってたことは聞いてたけど、主任と副主任なの（笑）。

岡村　どっちが……小田切さん？

阿部　小柄の早口の方が小田切さん、背の高いちょっと髪の薄い人が長沢さん。

岡村　お会いしたばかりなんで。

阿部　初めてあった人に留守番頼むなんて、信用されたものね（笑）。おたく、営業マン？

岡村　はあ。

阿部　何を売るの？

岡村　家の修繕関係の。

糸居　何、何の話？

阿部（大きな声で）糸居さん、おはようございます。足の調子はどうですか？　夜、痛みます。

糸居（不快そうな声で）　痛むこともあるし、痛まないこともあるわ。

阿部　膏薬、貼りかえましょうか？

糸居（うるさそうに）結構よ。

阿部　そうですか……じゃあ。

阿部、台所にいく。仕事をしながら、岡村に話しかける。

阿部　リフォームの人でしょ？

岡村　えっ、はあ。

阿部　あまり阿漕なことはやめなさいよ。

岡村　僕は別に……。

阿部　ちょっとの地震で倒れるとか脅して、高いものを売りつけるんでしょ。

岡村（糸居を気にしながら）脅してなんていません。それに、確かにこの家は危ないんです。

阿部　大丈夫、聞こえないわよ。まあ、相当古いから危ないことは危ないんでしょうね。でも、そこに転がってる器具で本当に倒壊が防げるの？

岡村　防げます。そう聞かされてます。

阿部　少しは効果もあるんだろうけど、高いんでしょ、それ。

岡村　特許とかありますから。

阿部　インチキというわけではない。しかし、効果を証明するデータはほとんどない。しかも法外な値段。

岡村　法外かどうかは、お客様が決めることです。押しつけてはいません。

阿部　ものは言いよう。増えてるのよね、そういうお年寄り目当ての商売が。それで、センターにもね、こういう業者が出入りしていたらただちに連絡するようにって、役所の方からお達しがきてるの。ブラックリスト（紙を見せる）。

岡村　……。

糸居　阿部さん。

阿部　はい。

糸居　岡村さんにデコポンを。

阿部　デコポン？

糸居　冷蔵庫にあるから。

阿部　はいはい。

糸居、立ち上がろうとする。

岡村　あっ、お茶ですね。

岡村、糸居にお茶をいれる。阿部、戻ってくる。

阿部　デコポンなんてないですよ。八朔ならありましたけど。

糸居　八朔、あったでしょ。

阿部　デコポンって言いましたよ。

糸居　八朔って言ったわよ。大沢さんが送ってくれたやつ。

阿部　はいはい。（岡村に）はい、どうぞ。

糸居　むいてあげて。

岡村　僕、果物は苦手なんで。

阿部　気に入らないのよ。

岡村　何がですか？

阿部　私としゃべってるでしょ。でも聞こえないから。やきもち焼いてる。

岡村　そんな……。

阿部　おばあさんだってやきもち焼くのよ。老人ホーム、行ったことある？　すごいわよ。色気づきだした中学生と一緒。告白したの、ふられたのなんてやってるの。それも真剣に。クラスの人気者とかマドンナとか、必ずいるじゃない。ホームにもいるのよ。じいさんばあさんでも、格好よかったり、性格がいいとやっぱりもてるのよ。それでいろいろプレゼントしたりして気をひこうとするのよ。もう涙ぐましいわよ。ライバル同士が喧嘩したり……。

岡村　恋のライバル？

阿部　そうよ。子供みたい。いや子供の方が理性的ね。微笑ましいを通り越して、情けなくなる。

岡村　人生をやり直してるんですかね。

阿部　あのね、私、別にあなたの商売の邪魔なんかしないから。

岡村　……。

阿部　あなたのことチクっても一銭になるでなし。感謝されるでなし。年寄りはお金、持ってるしね。困ることなんてないの。それに私たちだって、似たようなもの。

岡村　そうなんですか？

阿部　うちのセンターの所長なんて陰で結構ずるいことしてるわ。末端の私たちはこき

使われてるけど。ううん、すごい人もいるわ。よく、通帳預けたら使われちゃったなんて話、聞くでしょ。あんなこと珍しくないのよ。事件になるのはごく一部。氷山の一角ってやつ。

岡村　たいへんな仕事だとは……。

阿部　ボランティアと勘違いしてる人もいるわ。待遇悪いのよ。３Ｋ職場。でも私くらいの歳になると、仕事ないし。大体、介護保険制度ってのも……こんな話聞きたくないわね。まあ、だから心配しないで。

岡村　僕も好きでやってるわけじゃ。

阿部　何よ、急に弱気になって。それじゃ、のしあがれないよ。うんと稼いでさ、それを元手に何か商売でも始めなさいよ。お年寄りからカンパをいただく、そう思えばいいのよ。

岡村　はあ。

糸居　阿部さん。

阿部　何ですか？

糸居　この間の筑前煮なんだけど、ちょっと辛かったわ。

阿部　そうですか。（岡村に）歳をとると、味覚も変になるのよ。

糸居　竹の子も固くて、私じゃ歯が立たなかったわ。もうすこし柔らかく煮てくださらないと。

阿部　すみません。（岡村に）自分じゃ、料理なんか全然できないのよ。一人前に講釈はたれるけど。

糸居　保険料、払ってるんですから。

阿部　二言目にはこれ。まるで、女中と奥様みたいでしょ。私、姑がいたんだけど、そっちの方がよっぽど扱いやすかった。それにここには小姑もいるしね。

岡村、笑う。

糸居　岡村さん。デコポン、もっとどう？

阿部　あら、デコポンだったんですか、これ？

糸居　大沢さんが毎年、四国から送ってくだ
さるの。
阿部　八朔を？
糸居（不愉快そうに）だから八朔よ。
阿部　四国はどこなんですか？
糸居　どこって？
阿部　四国はどこから？
糸居　知らないわよ、そんなこと。そこの箱
に書いてあるでしょ。

阿部、宅配便の箱の伝票を見る。

阿部　愛媛県松山市……大沢君江……大沢君
江。大沢。
糸居　どこだったの？
阿部　松山です。
糸居　そう。
阿部　お友だちなんですか？
糸居　友だちじゃないわ。病院でお世話した
人よ。
阿部　患者さん？
糸居　患者って言わないわよ。妊婦は病人じ
ゃないから。義理堅い人がいるの。でもこ
っちもただじゃおけないでしょ。正直、面
倒なんだけどね。
阿部　私ぐらいですか？
糸居　何が？
阿部　この大沢君江さんの歳。
糸居　あなた、いくつなの？
阿部　五十三です。
糸居　……そんなところかしら。どうして、
知ってる人？
阿部　いえ、ちょっと。
糸居　帰ってきたら、聞いてみなさいよ。あ
の人たちなら知ってるから。
岡村　主任さんたち遅いですね。
阿部　今日、銀行混んでるわよ。二十五日だ
もの。
岡村　あ、そうだ、給料日だ。

チャイム。

岡村　帰ってきました。

岡村がドアを開けると、松本裕子が立っている。

裕子　失礼します。こちら、長沢計子さんのお宅では。

岡村　ええと、ちょっと阿部さん。

阿部も玄関にくる。

阿部　何……どちら様？

裕子　松本といいます。長沢さんのご家族の方でいらっしゃいますか？

阿部　いえ。私はホームヘルパーだし、こっちは営業マンだし。

裕子　おうちの方は誰も？

岡村　主任さんたちは銀行で、すぐ帰ってくると思いますが。（阿部に）婦長さんは家族のようなものじゃないんですか？

阿部　どうなんだろ。（裕子に）あの、家族じゃないですが、一緒に暮している家族みたいな人はいることはいますが。

裕子　長沢さんはすぐにお帰りになるんですか？

岡村　給料日だから。

阿部　ちょっと待ってね。

阿部、糸居の側まで行く。

阿部　糸居さん、長沢さんのお客さんなんですけど、どうします？　待っていただきます？

糸居　地震のこと？

阿部　それは岡村さん。それとも出直してもらう？

糸居　待っていただいて。あの人たちすぐ戻るだろうから。ねえ、デコポン、ある？

阿部　八朔はありますよ。
糸居　出してあげて。

阿部、裕子のところへ戻る。

阿部　どうぞ、中でお待ちください。
裕子　あ、はい。お邪魔します。
阿部　あ、そっちは岡村さん。リフォーム会社の営業マン。
岡村　アクロスリフォームの岡村と申します。（名刺を出し、裕子に渡す）
阿部　アクロス（ブラックリストを見る）…
裕子　（岡村に）お茶いれるからお相手して。どうか、おかまいなく。

阿部、台所へ。

糸居　（岡村に）どちらのお嬢さん？
岡村　主任さんを訪ねていらしたんです。
糸居　あなたと結婚するの？
岡村　何言ってるんですか！　主任さんを訪ねてこられたんです。僕とは初対面。
糸居　きれいな人ね。
岡村　（裕子に）婦長さん、耳が遠いんで。
裕子　婦長さんって、おっしゃいました？
岡村　はい。こちら、元婦長さん。
裕子　フジミ産婦人科病院の？
岡村　そうらしいです。僕も今日聞いたばかりですが。
裕子　こちらもフジミ病院の……。

台所にいた阿部、急に顔を出す。

阿部　糸居さん、フジミにいたの！
岡村　阿部さん、知らなかったの？
阿部　知らなかったわよ。
岡村　松本さんもご存じなかったんですか？あともう一人いらっしゃるんですよ。副主任で……えーと。
阿部　小田切さん。

岡村　三人でここに暮してるんです。

裕子　じゃあ、三人とも。

岡村　元同僚らしいですね。

阿部　フジミ産婦人科の……。

岡村　もうないらしいですが。

阿部　つぶれたのよ。

岡村　病院もつぶれるんですか？

阿部　だって、あそこは。

糸居　（不機嫌な声で）岡村さん、私にも紹介してくださらない。

岡村　ええと、松本さんです。

裕子　松本裕子といいます。あの、フジミ産婦人科には、いつ頃いらっしゃったんですか？

岡村　（糸居に）婦長さん、フジミ病院にはいつ頃おられたんですか？

糸居　いつ頃？

岡村　はい。

糸居　どうして？

岡村　松本さんが知りたいそうです。

糸居　私、ずっとフジミにいたのよ、準看の頃からずっと。よそにいったことはないわ。だから四十八年。病院は十年前にやめたの、六十五のときに。

阿部　（呟く）ずっといた……。

岡村　主任さんや副主任もずっとフジミなんですか？

糸居　そうね、ほとんどそうね。

裕子　あの、婦長さん。五年前にフジミ病院がつぶれた後、病院の資料がどうなったのか、ご存知ではないですか？

糸居　何？

岡村　資料です。（裕子に）カルテとか？

裕子　ええ。

岡村　カルテとか。

糸居　私、もうやめてたから。

裕子　長沢さんならご存知では？

糸居　あの人もやめてたわ。もうないんじゃないの。院長がつかまって、一切合切、警察に持ってかれたみたいよ。

裕子　産科の方の資料も？

糸居　知らないのよ。そういうことは事務長に聞いたら？

裕子　事務長さん、亡くなっていました。

糸居　ああ、そう。矢野さん、亡くなったの。そういえば毎年梨を送ってくれたのに、去年はこなかったわね。

裕子　一昨年に。

糸居　そう。

岡村（裕子に）何か調べてるんですか？

阿部　あそこはいろいろあったからね。

岡村　そうなんですか。

阿部　知らないの？　ニュースにもなったわよ。悪くもないのに、何人もの人がとられちゃったのよ。

岡村　お金をですか？

阿部　違うわよ。その、あれよ、子宮。

岡村　しきゅう。

阿部　女の人の、子供のできるところ。

岡村　ああ、聞いたことある……ような。

阿部　岡村さん、ここらの人じゃないの？

岡村　隣町です、実家は。それにずっと東京でしたから。

阿部　無資格の素人が検診してね、悪い腫瘍だから取っちゃえって、乱暴な話よね。（裕子に）あなたも、その？　でも、あの事件があったのはかなり前だから、あなた、関係……ないわよねえ。

裕子　そっちじゃないんです。産科の方。

阿部　産科？　お若く見えるけど。

裕子　母がそこで。

阿部（糸居に）糸居さん、この人、おたくの病院で産まれたんだって。

糸居　あら、そう……悪いけど、お顔を思いだせないわ。

阿部　あたりまえじゃない。あのね、糸居さん、私だってあの病院に一度お世話になったのよ。覚えてないでしょ。

糸居　そうなの？　私がお世話した？

阿部　担当の看護婦さんの名前も顔も忘れた

わ。だって大昔のことだもの。

糸居　忘れないようにするにはね、ノートをつけなきゃダメ。大事なことはノートに。

阿部　ノート？

糸居　習慣よ。

裕子　母の担当の看護婦さんが、長沢さんという方だったと。

岡村（糸居に）主任さんが担当だったようです。（裕子に）主任さんにお聞きしたいことがあるんですよね？

糸居　覚えてるかしら。あの人最近呆けてきたから。

阿部（裕子に）失礼だけど、おいくつ？

裕子　二十六です。

阿部　覚えてないかもね、そんな昔のこと。

糸居　でもわかるわよ。

阿部　どっちよ。

糸居　だから、ちゃんとノートをつけてるって言ってるでしょ、ノートを。

阿部　二十六年前ですよ。そんな、昔のことまで？

糸居　二十六年前でも三十年前でもちゃんと残ってるのよ。捨てないもの。私たちの習慣なの、ずっとそう。今でもそう。

裕子　それ、まだ持ってらっしゃるんでしょうか？　ここにあるんですか？

糸居　あるわよ。

裕子　あるんですね。

糸居　何が？

裕子　ノートです。

糸居　何の？

裕子　……。

岡村（裕子に）主任が帰ってきてから聞いた方がいいですよ。

阿部　私、仕事片付けちゃうから。岡村君、彼女のお相手してなさい。

阿部、台所へ。以下、糸居は岡村が裕子と話している間、ずっと面白くない顔で、もくもくと八朔を食べ続ける。

岡村　岡村君になっちゃった（笑）。

裕子　営業って、たいへんでしょう。

岡村　いや。その、今の仕事は始めてまもないんですが、どうも、あまり、向いていないようで。ほんとはデザインの方、やりたくて、専門学校にも行ったんですが、なかなか、その、うまく、いかなくて。でもやっぱり、僕はデザインを。

裕子　（名刺を見て）設計なんておやりにならないの？

岡村　いや、そういう方面じゃないんです。インテリアの。

裕子　（耐震金具を見て）これは？

岡村　ああ、それは、その……耐震用の補強金具なんです。

裕子　これを取り付けるんですか。

岡村　ええ、柱に。

裕子　うちも古家なんです。築四十年。こういうの、付けた方がいいんでしょうか。

岡村　いや、こんなの……気休めみたいなもんです。

裕子　気休めなんですか。

岡村　地震なんて、その、起きてみないとどうなるかわからないですから。

裕子　はあ。

岡村　二十六ですか？

裕子　えっ？　はい。

岡村　僕も二十六です。ネズミ年？

裕子　ええ。

岡村　一緒だ。まさか水瓶座だったりして。

裕子　水瓶座です。

岡村　そうですか、偶然だな。まさか、二月生まれじゃ……。

裕子　二月です。七日。

岡村　二月七日！

裕子　まさか。

岡村　本当です。（免許証を出し）ほら、嘘じゃないでしょ。

裕子　すごい偶然ですね。

岡村　すごいです！

阿部、台所から出てきて。

阿部　どうかしたの？

岡村　僕たち誕生日が同じなんです。というか、同じ年の同じ日に生まれたんです。

阿部　そりゃすごいわ！

糸居　何の話よ。

阿部　（糸居に）この二人ね、同じ日に生まれたんだって。

糸居　それで結婚するの？

岡村　そうじゃなくて……。

阿部　何日なの？

裕子　二月七日です。

阿部　二月七日！

岡村　まさか、阿部さんも？

阿部　息子よ。うちの子が二月七日。

岡村　ネズミ年？

阿部　ネズミ？　ネズミだったっけ。忘れちゃった。

裕子　それにしても三人同じ日なんて。

岡村　すごいですよ。

糸居　何がすごいの？

岡村　阿部さんの息子さんも誕生日が一緒なんです。

糸居　多い日があるのよ。三百六十五日、均等には生まれないの。少ない日もあれば多い日もあるの。

阿部　寒い日だった。それだけしか覚えてないわ。

糸居　（呟くように）そういうのはノートを見ればいいのよ。すぐわかる。

阿部　遅いね、長沢さんたち……さて、私、これで帰るわ。もう一件、あるんで。（糸居に）糸居さん、私、帰ります。仕事、済ませましたんで。（カードを出し）ここにサイン、お願いできますか。

糸居　印鑑じゃダメなの？

阿部　もちろんいいですよ。

糸居　その箪笥の一番上の引き出し。
阿部　いいんですか、勝手に出して。
糸居　いいわよ。

阿部、引き出しをあけ、中を見る。

阿部　印鑑、印鑑……。

阿部、引き出しの中をさぐる。何か見つける。顔色が変わる。
糸居や岡村たちに見つからないようにノートを一冊取り出し、服の下に隠す。印鑑を取り出し、糸居に見せる。

阿部　糸居さん、これ？
糸居　そうよ。

阿部、糸居の目の前でカードに印を押し、引き出しに戻す。

阿部　糸居さん、大事なものが入ってる場所を簡単に他人に教えちゃダメよ（笑）。（岡村に）じゃあ、私はこれで。岡村君、後、お願いね。
岡村　わかりました。
阿部　もうじき帰ってくるだろうから。

阿部、裕子に頭を下げ、出て行く。

裕子　銀行、混んでるみたいですね。
岡村　おろすだけなんですが、お年寄りはATM、苦手だったりするから。
糸居（裕子に）堕ろすの？
裕子　えっ？
糸居　中絶は母体によくないのよ。
岡村　婦長さん、何言ってるんですか？
糸居　だって、主任のところへ相談にきたんでしょ。
岡村　違いますよね？
裕子　違います！

糸居　そう。

岡村　（裕子に）すみません。

裕子　いえ……。

糸居　結婚すればいいのよ、あなたたち。

岡村　そういうんじゃないんです。

糸居　（裕子に）デコポン、いかが？　酸っぱいものほしいでしょ。

岡村　そうじゃないし、八朔だし。

裕子　婦長さんは、もう昔のことなんか覚えてらっしゃらないでしょうね。

岡村　たぶん……あの、主任さんに、長沢さんに何を？

裕子　それはちょっと……。

岡村　すみません、立ち入ったこと。

裕子　あの、岡村さんはどこで生まれたんですか？

岡村　病院ってことは聞いてましたが、どこだなんて今まで気にもしなかったし、親も言わなかったし。母はもう亡くなってましたし。でも、今日、わかったんです。

裕子　今日、わかった？

岡村　はい。僕、七人兄弟の末っ子で、姉が六人います。そういう女性がフジミ産婦人科で出産したそうです。それ、母なんです。間違いないです。有名だったそうです。この看護婦さんたちが言ってました（笑）。

裕子　そうですか、驚かれたでしょう。

岡村　黙ってました。どうも母は嫌われていたようなんで。

裕子　あっ！

岡村　どうしたんですか？

裕子　ということは、私と岡村さんは、同じ日に同じ場所で生まれたんですよ。

岡村　あっ、そうですね！　そうだ、そういうことなんだ！

裕子　すごいですね。

岡村　すごいです。

裕子　お母様は、いつ。

岡村　高校二年の冬に。

裕子　そうですか。

岡村　そちらはお元気で？

裕子　母ですか？　母は一週間で亡くなりました。

岡村　一週間前に？

裕子　違います。母は私を産んで一週間後に死んだんです。

岡村　そうでしたか。

裕子　ですから母の記憶はありません。

岡村　……。

裕子　父方の祖母に育てられました。

岡村　同じ日に同じ場所で生まれたのに、いろいろなんですね。

裕子　いろいろですね。

岡村　いろいろだ。

糸居　岡村さん。

岡村　あ、はい。

糸居　遅すぎない？

岡村　そうですね。

糸居　きっとお金、とられちゃったのよ。

岡村　まさか。

糸居　あの人たち、ぬけてるから。

岡村　そうなんですか？

糸居　そうなの。ぬけてるの。おっちょこちょい。うっかりやさんなの、昔から。

岡村　看護婦さんがおっちょこちょいじゃ、患者は心配ですね（笑）。

裕子、笑っていない。

岡村　あの、僕、そこまで見てきます。（裕子に）ちょっと、いいですか。

裕子　あ、はい。でも誰か来たら。

岡村　すぐ戻りますから。

岡村、出ていく。

裕子（糸居に）お茶、いれましょうか？

糸居　そう。お客様に悪いわね。

裕子　あの、うっかりやさんっていう話なんですが。

糸居　何屋さん？

裕子　長沢さんたちのこと、うっかりやだって、おっちょこちょいって。

糸居　そうなの、ほんとに困った人たち。私にしょっちゅう怒られてたわ。

裕子　例えば、どんな失敗を？

糸居　えっ？

裕子　ミスというか。

糸居　ミスはしないわよ。ミスしたらたいへんでしょ。病院なんだから。

裕子　はあ。

糸居　ただのうっかりなの。せいぜい薬を間違えるくらい。

裕子　……。

糸居　同姓の人がいると、よくあることよ。

裕子　……。

糸居　たいしたことじゃないけど。

裕子　あの、赤ん坊の。

糸居　やっぱりおろすの？

裕子　いえ、私、妊娠してないんで。

糸居　臨月まで気がつかない人もいるのよ。目立たない体型の人で、ちょっと太ったかな、なんて思ってたら妊娠してたの。おっちょこちょいよね。うっかりやさんにもほどがあるわ、ねえ。

裕子　そうですね。

糸居　だから、調べた方がいいわよ。

裕子　あの、私……したことないですから。子供のできるようなこと。

糸居　最近？

裕子　いえ、ずっと。

糸居　ここ半年？

裕子　いいえ。生まれてこのかた、一度も。

糸居　一度も？

裕子　一度も。

糸居　あら、珍しい。

裕子　いけませんか？　二十六にもなって、その、経験なくたって……。

糸居　いいわよ、別に犯罪でもないし、病気でもないし。

裕子　……。

糸居　どこか悪いの？

裕子　いいえ。

糸居　女の人が好きなの？

裕子　そういうことでなく……縁がなかったからです。たまたまです。

糸居　きれいなのに、かわいそう。

裕子　きれいじゃないです。でもかわいそうでもないです。

糸居　あなた、隙がないから。

裕子　つんけんしてるつもりはないんですが。

糸居　バージンさんなのね。

裕子　……。

糸居　主任にその相談なの？

裕子　いいえ。

糸居　そういう相談ならダメよ。あの人だって結婚しなかったし。男の人としたことあるかは知らないけど。

裕子　そんな相談しません。

糸居　私もダメよ。あなたと同じだから。

裕子　えっ？

糸居　あなたと同じ。男性としたことないの。生まれてこのかた。珍しい？　いけない？　七十五で経験なくたって、犯罪でも病気でもないのよ。女の人が好きでもないの。縁がなかったの。たまたま。なぜ結婚しなかったかっていうと、うちに仕送りとか……この話、さっきしなかった？

裕子　いいえ。

糸居　したような気がしたんだけど。

裕子　岡村さんにじゃないですか？

糸居　そう、岡村さん……岡村さんのこと好きなの？

裕子　今日会ったばかりですよ。それが好きだとか、結婚だとか。

糸居　結婚するの？

裕子　しません。

糸居　わからないでしょ、先のことなんて。

裕子　そうですけど。

糸居　縁というものは思わぬところにあるの。

私が言うのもなんだけど。

裕子　……。

チャイム。

裕子　私、出ます。

ドアを開けると宅配便の男。

宅配便の男　お届けものです。

裕子　はい、ちょっと待って。

裕子　戻る。

裕子　宅配便ですけど。

糸居　ああ、ごめんなさい。そこの箪笥の一番上の引き出し、そうそう。そこに印鑑あるから。

裕子、印鑑を確認。宅配の伝票に押す。

宅配便の男　はい、どうも。重いですよ。

裕子　ご苦労様です。

裕子、荷物を糸居のところへ運ぶ。かなり重そう。

糸居　何？

裕子　甘夏……ですね。

糸居　どこから？

裕子　岡山です。

糸居　岡山さん？

裕子　岡山産です。

糸居　そんな人、知らないわ。

裕子　いえ、岡山県から。送り主は山口さん。

糸居　山口県？

裕子　いいえ、岡山県の山口富子さんから。

糸居　ああ、山口富子さん。その人ね、双子を産んだの。それも二度も。

裕子　へえ。

糸居　（裕子をじっと見る）……。

裕子　どうしました？

糸居　あなた、そうやって笑うと、すごくきれいなのに。いつも笑っていればいいのに。そうすれば結婚もできるし、男の人ともたくさん経験できるわよ。

裕子　別に、たくさんしたいとは……。

糸居　悪いけど、あけてくださる？

裕子、宅配の箱をあける。

裕子　立派な甘夏ですね。

糸居　かたちはね。でも、当りはずれがあるの。はずれのはね、まるで紙を食べてるみたいなの。甘味も酸っぱ味もなくて。それが私によく当るの……あなたも、そうじゃない？

裕子　そんなこと……。

糸居　そういうものよ。

裕子　……。

糸居　双子、産んでみたい？

裕子　ええ、かわいいじゃないですか。

糸居　双子がかわいいとは限らないわよ。

裕子　でもそっくり同じ顔が並んでるってのって、考えるだけで楽しい。

糸居　そっくりじゃないわよ。

裕子　双子なんでしょ。

糸居　山口さんのところ、二組とも二卵性だから。つまらないわね、似てない双子なんて。ただ同じ日に生まれたっていうだけで。

裕子　私と岡村さんみたいに。

糸居　誰が？

裕子　私と、あの営業マンの岡村さんが。さきほど申し上げたでしょ。

糸居　そうだっけ……そうなの。あなたたち双子だったの？

裕子　そういうことじゃ……。

糸居　じゃあ、結婚は無理ね。

裕子　結婚しません。

糸居　きれいなのにね。

裕子　きれいじゃないです。
糸居　甘夏、食べない？
裕子　結構です。

ドヤドヤと長沢、小田切が戻ってくる。
迎えにいった岡村も一緒に。

小田切　ああ、たいへんだった。
長沢（糸居に）ただいま、遅くなりました…
…（裕子を見て）あら、お客様？
岡村　松本さんです。
糸居　ひったくりにあったんじゃないかって。
長沢　それがすごい人なの。椅子にも座れないくらい。
小田切　やっと順番がきたら、今度はおろしてくれないし。
長沢　そんな大金、何に使うのかって。
小田切　頭にきたから、「自分のお金をどう使おうが勝手でしょ。紙飛行機にしてとばそうが、火にくべようが自由でしょ」って。行員のバカ娘、怒鳴ってやったのよ。
長沢　オレオレ詐欺とかいうのが多いんで、年寄りが大金おろすときは必ずチェックするんだって。
小田切　そんなに頼りなくみえたのかしら。
長沢　この人ったら店中に聞こえるような大きな声出すから、恥ずかしくて。
小田切　あんまりしつこいんだもの。
長沢　カードにすればいいんだけどね。
小田切　あれは苦手。緊張するの。金利もろくに払わないんだから、おろすのぐらい窓口でやってもらいたいわ。
長沢（裕子に）どちら様、でしたっけ？
岡村　松本裕子さんです。主任さんを訪ねてこられて。
小田切（岡村に）阿部さん、来た？　ヘルパーの。
岡村　お二人が出かけてすぐに。

小田切、阿部の忘れていった紙袋をみつ

ける。

小田切　これ、阿部さんのじゃない。

長沢　あの人、よく忘れ物するわよね、この間も。

小田切　おっちょこちょい。

長沢　うっかりやさん。

糸居　ちゃんとおろしたの？

小田切　はい、百五十万円（封筒を渡す）。

糸居　百八十万じゃなかった？

長沢（小田切に）ほら、やっぱり百八十だったでしょ。

小田切　百五十じゃないの？

糸居　メモしていかなかったの？

長沢　だから、私、百八十だって。

小田切（ふくれて）そんなに自信があったなら、そう言ってくれればいいじゃない。

長沢　だってあなた、絶対百五十だって譲らなかったから。

岡村　あの……百五十で結構です。

小田切　そう？　よかったじゃない。婦長さん、百五十でいいって。

糸居　ダメよ。岡村さんの儲けがなくなっちゃうわ。歩合なんだから。（岡村に）ねえ。

岡村　いいです。

糸居　よかないわよ。商売でしょ。ボランティアじゃないもの。三十万、あとから必ずもらいなさいよ。

岡村　……あの、僕、工事、始めさせてもらっていいですか？

長沢　岡村さんがやるの？　今から？

岡村　なるべく早い方が。地震は明日かもしれないし。（立つ）

糸居　どこ行くの？　帰るの？

長沢　工事するんですって。

小田切　そうよね、明日どころか、今日起こるかもしれないわ。

岡村、玄関から外へ。

長沢、松本裕子に気づく。

長沢　ごめんなさい。すっかり……ええと。
裕子　松本です。
長沢　私に何か？
裕子　おうかがいしたいことがあって……。
長沢　何？

岡村、耐震金具の入った段ボール箱と工具箱を持って戻ってくる。

岡村　また、床下へもぐりますので。
小田切　はい、よろしく。
岡村　ちょっと音、うるさいと思いますが。
長沢　平気ですよ。
小田切　平気、平気。

岡村、台所に。そこから床下へもぐる。糸居は二人がおろしてきたお札を一枚ずつ馬鹿丁寧に数え出す。小田切、宅配便の箱に気づく。

小田切（伝票を見て）山口さんか。
長沢　山口富子さん？　甘夏でしょ。
小田切　甘夏。
長沢　いつもそうよ。
小田切（糸居に）婦長さん、山口さん、いつも甘夏でしたっけ？
糸居（札を数えながら）山口さん？
小田切　これ。
糸居　何、それ？
小田切　何って。宅配、きたんでしょ？
裕子　私が受け取りました。
小田切　婦長さん、山口さんからの。
糸居　八朔でしょ。
小田切　甘夏ですよ。でも山口さん、甘夏じゃなくて、清見じゃなかった？
糸居　富子よ。
小田切　みかんの種類です。
長沢　甘夏よ。
小田切　そうだっけ。

糸居　いやだ、何枚まで数えたか、わかんなくなっちゃったじゃない。

岡村が床下でガンガンと工事をする音が響く。

小田切　やってる、やってる。

長沢　今日中にすむのかしら。二十セットもあるっていってたけど。

小田切　取り付けまでなんて、たいへんね。

長沢（裕子に）ごめんなさい……何でしたっけ？

裕子　長沢さんに、おうかがいしたいことがあって。

長沢　私に？

糸居（数えながら）中絶の相談じゃないみたい。

長沢　そりゃ、私、もう現役じゃないし。

糸居　まだ経験がないのよ。

長沢　何の？

糸居　男性の。

小田切　いやだ、婦長さん。

糸居　彼女、二十六歳だけど。

小田切　婦長さんと一緒ね。

糸居　私はあるわ。

小田切　嘘ばっかり。

糸居　一度結婚したんだもの。

小田切　それは私。

糸居　結婚するのよ、岡村さんと。

小田切　誰が？

糸居　この人が。

長沢　あら、そうなの。

裕子　違います。岡村さんとは今日初めてお会いしたんです

小田切（あきれて）もう、婦長さん。

裕子　二十六年前のことなんですが。

長沢　二十六年前？　二十六年前ということは……私が四十……。

小田切　四十三、私が四十一。

長沢　その頃、お会いした？

小田切　馬鹿ね、この人、二十六なのよ。

裕子　母がお世話になって。

長沢　ああ、病院で。

裕子　担当の看護婦さんのお名前を調べるの、たいへんでした。病院はなくなっていましたし。

小田切　お母さん、覚えてなかった？

裕子　母は私を生んですぐに。

小田切　昔はそういうこともあったわね。

長沢　ああ、医療事故のこと？　そりゃ、うちの病院はいろいろあったけど。訴訟は無理じゃない。二十……。

小田切　二十六年前。

長沢　二十六年も前のことでしょ。それを今頃……ごめんなさい。あなたたち遺族には大切なことでしょうけど、当時の先生たち、みんなお亡くなりになってるし、病院だってもうないし。賠償を求めるにも相手がいないわけでしょ。それに悪いけど、もう時効ってやつじゃない？

裕子　母が死んだのは元々体が弱かったせいだと聞いています。心臓に先天性の障害があったようです。出産もやめた方がいいといわれていたのを母がどうしてもと。

小田切　そういっても、何か起こると必ず病院のせいになるわ。

裕子　出産は順調だったと聞いています。どちらかというと安産だったと。

小田切　医療事故じゃないの？

裕子　松本聡子といいます（写真を見せる）。

小田切（覗き込み）お母さん？　きれいな人ね、あなたに似て。

裕子　似てますか？

小田切　……ええ。

裕子　ほんとうに似てます？

小田切　似てるんじゃないの。だって親子なんだから。

長沢（老眼鏡を取り出し、写真を眺める）……悪いけど、覚えてないわ。私ね、あの病院に三十八年いたの。その間にお世話した妊婦さんの数、どのくらいになると思う？

ゆうに一万人を超えるの。この町の人口と同じくらい。よほど強烈な印象がなければ覚えていないわ。

小田切　ただでさえ物忘れがひどいのに。

長沢　失礼だけどお母さん、平凡なお名前で、しかも安産で、それも二十年以上前。それではちょっと。

小田切　この写真も手がかりにならないの。だって、妊婦さんはたいがいお化粧しないでしょ。すっぴん。まあ、中には塗りたくっているのもいるにはいたけど。

糸居　（写真を見て）どなた？

小田切　この方のお母さん。

糸居　若い方ねえ。

小田切　昔の写真ですよ。

糸居　似てないわね、あなたと。

小田切　そう？　似てるんじゃない？

裕子　似てないっていわれてました。

小田切　娘はお父さんに似るのよ。

裕子　父にも。

小田切　おばあちゃんには？

裕子　祖母にも。

小田切　そういうの、案外身内はわからないものなのよ。でも他人が見ると……。

糸居　（きっぱりと）似てないわ。

長沢　似てる似てないなんて、いい加減なものよ。似てるといえば似てるし、そうでもないといえばそうでもないし。

小田切　私ね、五つか、六つの頃だったと思うけど、隣の家のおばさんに、雅美ちゃんは向かいの床屋のおじさんにそっくりだねなんていわれたの。

長沢　まあ。

小田切　それを母さんに言ったら、母さん、もうカンカン。隣に怒鳴りこんで。

長沢　そりゃそうよ、まるで浮気……。

裕子　そういうのはないと思います、母に限って。

岡村、床下から出てくる。

岡村　あの……。

小田切　もう終わったの？　早いわね。

岡村　これ。

岡村、木切れをテーブルにのせる。ボロボロになっている。

小田切　これ、何？

岡村　シロアリです。

小田切　シロアリ！

岡村　金具、とりつけようとしたら、ぼろっと。一箇所だけじゃなくて、そこら中。

長沢　やられてるの？

岡村　金具がつきません。

小田切　何とかならないの！

長沢　消毒すればいいんじゃないの、シロアリの。それはおたくじゃやらないの？

岡村　今から薬を撒いても……進行はとめられるでしょうが、柱がスカスカになってるから。

小田切（長沢に）ちょっと、どうする？　金具がつかなきゃ、震度４が。

長沢　金具の問題じゃないわよ。シロアリにやられてるってことは……大手術しなくちゃダメなのよね？

岡村　ええ、まあ。

小田切　手術なの？　薬でなんとかならないの？

岡村　柱がもたないのでは……。

小田切　じゃ、震度４どころじゃなく震度３でも危ないってこと？

長沢　地震がなくてもつぶれちゃうのよ。

小田切　どうするの？　建て替えなんて絶対無理よ。

糸居　ねえ、この写真の人、岡村さんに似ていない？

小田切　何のんきなこと言ってるんですか！　婦長さん、この家、シロアリにやられてるのよ！

糸居　あら、そう。

小田切　あらそうじゃなくて。家がくずれちゃうんですよ。

糸居　震度４で？

小田切　アリに食べられてるんです！

糸居　そんな大きな声、出さないでよ。ほら、またわからなくなっちゃった。

長沢　わかった。

小田切　何が？

長沢　去年、春頃、シロアリの駆除業者がきたでしょ。

小田切　無料で調査してあげるとかいって、床下に入ったわ。

長沢　高すぎるから、結局私たちことわったじゃない。すごく粘ったけど。

小田切　どうなっても知りませんよ、なんて捨て台詞。

長沢　そのときにきっとシロアリの卵を撒いていったのよ。

小田切　訴える？　確か名刺もあったわよ。

小田切、箪笥の中のノートを探す。

小田切　ええと、去年の……（ページを繰る）あった、あった。これこれ。ええと、アトラス消毒株式会社。

岡村　アトラス……。

小田切　主任、高麗邦文。

岡村（呟く）高麗……高麗さん、来たのか。

長沢　知ってる人？

岡村　いえ、いいえ。珍しい名前だなと。

小田切　ええと、去年の五月十二日水曜日、二時頃に来たのよ。三十二歳独身、千葉商科大卒。出身は静岡県磐田市。実家は電気工事屋で、三人兄弟でお兄さんが跡をついでいて奥さんと男の子と女の子がいるの。上の男の子は小学四年生でサッカークラブ、下の女の子小学二年ではフィギアスケートをやってるわ。三つ下の妹さんは久留米に嫁いでいて男の子が一人。その子はす

ごい肥満でまだ幼稚園なのに痛風持ち。妹さんのご主人は地元のスーパー勤務でパートの奥さんと不倫をしてるの。でもその奥さんの旦那というのがどうも組関係者らしくて。それから実家の母親は自治会のダンスクラブに入ってるんだけど、股関節を傷めてお医者さんから手術した方がいいっていわれてるの。父親は……。

長沢　もういいわよ、そのくらいで。

岡村　それは？

小田切　ノートよ、覚え書。

長沢　習慣よ。忘れないようにノートをとっておく。看護婦時代からの癖。私たちの仕事って、ミスが命取りになるでしょ。

小田切　文字通りに（笑）。

長沢　だから、何でもノートにつけておくの。

小田切　一つの事故の背景にはね、何十、何百ものヒヤリ、ハッとがあるの。

岡村　ひやりはっと？

長沢　幸い事故にならなくても、ヒヤリとしたり、ハッとすることがたくさんあって。その積み重ねから本物の事故が起こるの。だから、ヒヤリとしたことや、ハッとしたことは、そのたびにノートにつけておくの。そうすることで事故を未然に防ぐ。

岡村（呟く）　探偵の身辺調査みたい……。

小田切　強盗も詐欺も事故、人間が災いをするの。これがほんとの人身事故。

長沢　シロアリとはまいったわねえ。

糸居（写真を見ながら）岡村さんにそっくり。

小田切　まだ言ってる。

糸居（裕子に）ねえ。

裕子　はあ（岡村と写真を見比べる）。

岡村　とにかく、このままではまずいです。ちゃんとしたシロアリ駆除業者に来てもらい、消毒して、それから脆くなった柱を取り替える必要があります。

小田切（札を示し）これで足りる？

岡村　それは、どうか……。

長沢　岡村さん、ダメねえ。営業マンとして

は失格。

岡村　失格？

長沢　だって、これで一銭にもならなくなったのよ。シロアリのことなんて黙って、知らん顔して金具をつけちゃえばよかったのに。百五十でも利益は出るんでしょ。

岡村　はあ、まあ。

長沢　成績、よくないはずだわ（笑）。

岡村　すみません。

糸居（やっと数え終わる）はい、確かに百五十万あるわ。

小田切　婦長さん、もういらないんです。

糸居　どうして？

長沢　シロアリの方を片付けなきゃならないんです。ほうっておくと、どんどん被害が大きくなっちゃう。

糸居　どんどん？

長沢　ええ。

糸居　それよりあなた、この人の相談に早くのってあげなさいよ。ほうっておくと、どんどん赤ちゃんが大きくなっちゃう。

裕子　赤ちゃんなんていません！

長沢　私に何を聞きたいの？

裕子　祖母が三か月前に亡くなりました。

糸居（裕子のお腹を見て）三か月なの？

裕子（無視して）私、ずっと看病してたんですが、亡くなる少し前におかしなことを言ったんです。

小田切　年寄りはみんなおかしなことを言うわよ。

裕子　「裕子ちゃんは、女の子よね？」って。

小田切　呆けたのよ。

裕子　「生まれたときは男の子だったのに」

岡村（小田切に）そういうことって、あるんですか？　途中で変わるってこと。

小田切　ないわよ、性転換手術する以外。

裕子　母は私が男の子だと思っていたらしいんです。祖母にもそう伝えたそうです。だから名前も裕一と……。

岡村　女の子だったのに？

裕子　病院から戻ってまもなく母は様態が悪くなり、一週間ばかりで死んでしまいました。お葬式やら何やらでバタバタしていたので、私が女の子だとわかったのは、生まれて十日もたってからだといいます。雇ったばかりのお手伝いさんにまかせていたらしいのですが、その方が、「みなさま、この子のことを坊ちゃん、坊ちゃんというが、この子にはチン……チンチンがねえです。かわりにくっきり縦線がついてなさる。この子は坊ちゃんでなく嬢ちゃんですがな」

岡村　おばあさん、びっくりしたでしょうね。

裕子　はい。

岡村　あやうく裕一になるところだったんだ。

裕子　祖母は粗忽だと責められたようでしたが、そのときは何しろ、母が死んだことで父も祖父も……。

岡村　お母さんは、あなたが男の子だと信じたまま亡くなられたのですか？

裕子　おそらく。

長沢　あなたのお母さん、男の子がほしかったんじゃない？

裕子　え？

長沢　男の子がほしいという思いが強すぎるとね、そういうことがあるのよ。

裕子　母はとにかく無事に生まれてくれればいいといっていたそうです。ですから男と女を間違えることなんて。

小田切　まだ小さいし、中に埋まってるってことも……。

裕子　私、母と似てないでしょ。

小田切　だから、それは。

裕子　母は男の子を産んだのだと、私は思うんです。ところが女の子に替わっていた。確かめるのは簡単です。病院に記録が残っているはずですから。二十六年前、松本聡子が産んだのは男の子だったのか、女の子だったのか。でも記録はないんです。いろいろ尋ねて回って、やっと当時の担当看護

婦が長沢さんだということがわかりました。あなたならもしかして、覚えているかもしれないと。

長沢　ですから、さっきも言ったように。

裕子　ええ、ご年配だし、私も難しいかと思いました。でもあなたはさっきおっしゃった。忘れないようにノートに何でも書いておくと。だったら、二十六年前、担当した妊婦に男の子が産まれたのか、女の子が生まれたのか、どこかに書いているのではないですか？

長沢　さっきも言ったとおり、あなたのお母さんのこと、覚えていないし。二十六年も前のことを書いたノートはもう……。

糸居　（小田切に）男の子が生まれたの？　女の子が生まれたの？　どっちなの？

小田切　それがわからないんです。

糸居　ああ、双子ね、二卵性の。

岡村　あの、もしかしてこの話、取り違えってことなんですか、赤ちゃんの。

裕子　ＤＮＡ鑑定をやればわかるんです。でも怖くて。

小田切　あれ、あまりあてにならないって話よ。頼りすぎない方がいいわ。

岡村　僕もそういうの心配したことあります。ほんとはうちの子じゃないんじゃないかって。血液型、うちの姉たちはＡかＢで、僕だけ一人、ＡＢ型だったから。でも父はＡＢですから、全然心配することなかったんですけどね。

裕子　お母さんは？

岡村　母ですか。ええと、Ｏ型だったかな。

間。

裕子　Ｏ型……ですか。

岡村　はい。確かＯ型。

裕子　間違いないですか？　お母さんもあなたも？

岡村　ええ。おかしいですか？

裕子　その……。

岡村　父はＡＢなんですよ。

裕子　お父さんがＡＢでお母さんがＯの場合、子供はＡかＢなんです。

岡村　ＡＢは？

裕子　ＡＢもＯもないんです。ＡかＢ。

岡村　（小田切に）そうなんですか？

小田切　……まあ、そうね。

岡村　ということは……僕は、あはは、あれ、そうなんだ。いや、父もＡＢだったから……あれ？　おかしいなあ……父とは似てるんですよ。ヒゲの薄いところとか、ヒゲだけじゃなくて、その、いろんなところのが、はえなくて……修学旅行なんて恥ずかしくて、父も、俺もそうだったって……それからそう、左利きです、母が。家族の半分が左利きで、僕もそう……（裕子に）本当にＡＢはないんですか？

裕子　……。

岡村　まいったなあ。じゃあ、浮気ですか。しかし、浮気って……うちの母親、ずっとこんなんですよ（太ってるというしぐさ）。息子がいうのも何だけど、普通の男は浮気したいとは絶対思わないんじゃないかなあ。しかし、まいったなあ。

裕子　お母さん、浮気なんてしてませんよ。

岡村　えっ、じゃあ、父の方ですか……そんなわけないか。

裕子　Ｏ型のお母さんがどんな血液型の相手と、その……浮気をされても、ＡＢ型の子供は生まれないんです。

岡村　じゃあ、母は浮気なんかしてないんですね（嬉しそう）……じゃあ、僕は？

裕子　残念ですけど、お母さんの子供ではないということです。

岡村　母の子供ではない。

裕子　はい。

岡村　じゃあ誰の子供なんですか、僕は？

裕子　それはわかりません。

岡村　そんな無責任な！

裕子　……。

岡村　すみません、あなたのせいじゃないですよね。ちょっと動揺しちゃって。いや、そういう心構えがないところへ、いきなり、そういうことといわれちゃうと。

糸居（小田切に）岡村さん、何を怒ってるの？やっぱり百五十万じゃダメだって言ってるんでしょ？

小田切　いえ、子供のことで。

糸居　彼女に堕せって言ってるの？

小田切　そうじゃなくて。

長沢　例外っていうのもあるのよ。

岡村　例外？　例外があるんですか。やっぱりあるんだ。じゃあ、僕、例外かもしれませんね。例外は結構あるんでしょ？

長沢　例外だから、そう多くはないでしょうけど。

岡村　たまにはあるんでしょ。

長沢　まあ。

岡村　稀には？

長沢　極稀には。

岡村　極ですか？

長沢　極々。

岡村　ということは、まずないということですね。

長沢　世の中、絶対はないの。

岡村　僕は……。

間。

岡村　僕も取り違えなんでしょうか？

裕子　岡村さん。

岡村　だって……（小田切に）どうなんですか？

小田切　どうといわれても、私には。

裕子　岡村さんも、フジミ病院で生まれたんですよ。

小田切　えっ！

長沢　そんなこと言わなかったじゃない。

岡村　言いそびれたんです。母はずいぶん嫌

われていたようだから。

小田切　それ、もしかして、あの……。

岡村　七人も産んだ、図々しい牢名主のような女が、僕の母です。

小田切　……。

岡村　ネズミのような貧相な亭主が、僕の父です。

小田切　あなた、人が悪いわね。

岡村　すみません。

長沢　岡村さん、隣町じゃなかったの？

岡村　隣です。でも移ったのは五年前。

小田切　人が悪いわ。

岡村　母は確かに無神経なところがあったから、嫌われることも多くて……。

小田切　……。

裕子　岡村さん、私と誕生日が同じなんです。つまり、同じ時に同じ場所で生まれたということです。

小田切　本当なの？

岡村　はい。

小田切　……。

裕子　ですから、私たちみんな初対面じゃないってことです。

小田切　えっ。

裕子　お二人も、婦長さんもその場にいらしたんですもの。私の母の担当は長沢さん、そして岡村さんのお母さんの担当は小田切さん、そうですよね？

糸居　何、何の話？

小田切　私たち、初対面じゃないんだって。

糸居　この人はフジミで生まれたんでしょ。

小田切　岡村さんもです。

糸居　あら、そう。

長沢　つまり、こういうこと。あなたたちが生まれたときに、取り違えがあったのではないかというわけね。

裕子　ええ。

長沢　あなたは、男の赤ちゃんと取り違えられたと。

裕子　はい。

長沢　確かに、生まれたばかりの赤ちゃんなんて、どれも似たようなものよ。でもね、ヒヨコじゃあるまいし、オスとメスを、男と女を間違えることなんてあると思う？　岡村さんだって、血液型ではそうかもしれないけど、本当に確か？　お母さん本当にＯ型だったのかしら。Ｏ型以外だったら何の矛盾もないのよ。ＡもＢもＡＢも出てくるもの。お母さん、亡くなってるんでしょ？　あなたもＤＮＡ鑑定する？

岡村　……。

長沢　いるのよ。珍しいことじゃないの。私たちが現役の頃にもたまにいたもの。取り違えられたんじゃないかって言ってくる親が。私の子がこんなに出来が悪いわけはない、こんなに不細工なわけがないって。言いがかりなの、育児ノイローゼ。でも、そんなこと言ってくるのは母親で、当人が言ってきたのは初めてだわ（笑）。

裕子　絶対ありえないと？

長沢　私たち、ミスをおかさないとはいわないけれど。そういうことはないわ。

裕子　見せていただけませんか？

長沢　だから、二十六年前のノートなんて。

裕子　婦長さんは、あるはずだって言ってました。

長沢（小声で）婦長さんは、呆けてるの。

裕子　えっ？

長沢　婦長は呆けてるのよ。

裕子　え？

長沢（大声で）婦長は呆けてるの！

糸居　呆けてないわよ、失礼ね！　どこが呆けてるっていうのよ。昨日の夕食の献立だって覚えてるわよ。ブリ大根に、昆布の佃煮に、ほうれんそうの胡麻あえよ。間違いないわ。ノート、見てみなさいよ！

裕子　ノートはあるんでしょ？

長沢　どうしても、私たちが取り違えをしたことにしたいの？

裕子　確認したいだけです。

長沢　仮に取り違えをしてしまったとしても、そんなこと書かないでしょ、普通。

裕子　私はただ松本聡子の……。

長沢　悪いけどもう帰ってくださらない。私たち、シロアリをどうするか相談しなくちゃならないし。岡村さんも、ご苦労さまでした。シロアリは私たちで何とかしますから。その間に震度４が来てしまったら、そのときはあきらめるわ。

裕子　教えてはくださらない。

長沢　ＤＮＡ鑑定でも何でもしてみて。

岡村（小田切に）あの、母のことですが、いろいろすみませんでした。

小田切　別に、その……。

チャイム。小田切が出る。阿部がいる。

阿部　どうも。私、忘れ物を。

阿部、入ってくる。

阿部（岡村と裕子に）こんちわ。

小田切　知ってるの？

阿部　さっき、来たときね。

小田切　ああ。

阿部　でも初対面じゃなかったのよ。

小田切　初対面じゃない？

阿部　だから、さっきは初対面だと思っていたけど、実は初対面じゃなかったの。

岡村　そうなんですか？

阿部　そう。それで、話はどこまで？

小田切　何のこと？

阿部　取り違えのこと、赤ん坊の。

長沢　あなた、聞いてたの？

阿部　いいえ。でも、おそらくそういう話になってるかなって。

裕子　そうです。

長沢　それはすんだの。誤解だってわかったから、もう帰られるの。あなたも、忘れ物もって帰って。

小田切　シロアリの相談があるから。
阿部　了解したの？
裕子　いいえ、でも。
阿部　ねえ、岡村君。
岡村　はい。
阿部　あなたのお母さん、岡村勝子さんっていうんでしょ。
岡村　そうです。よくご存知で。
阿部　ちょっと口が悪いわよね。
岡村　かなり悪いです。
阿部　口が悪いし、気難しくて我儘でお天気屋だけど、そんな悪い人じゃない。
岡村　僕にはいい母でした。
阿部　思い出したの。大部屋で一緒だったのよ、あなたのお母さんと。
岡村　母と阿部さんが……ということは。
阿部　うちの倅も、岡村君とそれからこちらの松本さんと同じ年、同じ誕生日。
岡村　そうかあ。
阿部　そして同じ場所で。
長沢　まあまあ、それは奇遇だとこと。でも同窓会はよそでやってくださらない。
阿部　それはダメですよ。ここじゃなきゃ。
小田切　何言ってんの、うちは喫茶店じゃないのよ。帰りなさいよ！
阿部　うるさいわよ、ババア。
小田切　ババアだって！
阿部　ババアでしょ？
小田切　ババ……。
長沢　あなた、阿部さん、何、その口のきき方。おたくのセンターに言って、もうあなた、替わってもらいます。それから役場の介護担当にもいいつけます。
阿部　いいですよ。どうぞ、ご自由に。でも今日は帰らないわ。
小田切　何、居直ってるの。警察呼ぶわよ。あんたたちも、さあ、さっさと。
阿部　どうぞ、呼んで。私、警察であんたたちのことすべて話すわ。困るのはあんたたちじゃないの？

長沢　困ること？　そんなものないわ。

阿部　赤ん坊の取り違えのこと。

小田切　いい加減にしなさいよ、あなた、何？　年寄りを脅して、お金でもまきあげようっていうの。

阿部　なるほど、そういう手もあったな。

小田切　本気？　おかしいんじゃない？

阿部　おかしい？　おかしいのはあんたたちじゃないの。

長沢　もうこれ以上言わないわよ。今すぐ出て行って、ここから。ほら、あなたも、あなたも。

糸居（札を渡し）これ、岡村さんに。

小田切　もういいんです！

阿部　取り違えのこと、認めるの？

長沢　認めません。

小田切　時効なの！

阿部（小田切）あら、あなたは認めるの？

長沢、小田切を睨みつける。

小田切　そういうんじゃなくて、二十……二十六年も経ってるんだから。

阿部　取り違えられた方には時間は関係ないわ。私の子ね、俊彦っていうの。心臓に障害があったの。何万人に一人の難病だった。遺伝性だとお医者さんは言ったけど、私の親戚にも亭主の親戚にも心当たりはなかった。生まれてずっと病院通いで、学校へもろくに行けずに、二十歳を迎える三日前に死んだ。いい子だったわ。「母さん、僕のために今まで苦労ばかりかけてごめんね。僕がいなくなったら、姉さんや兄さんによくしてやって。僕が母さんのこと独り占めにしてたから、姉さんたち寂しい思いをしてたから」って。優しい子だった。どんなに辛くても痛くても、我慢する子だった。どうしてこんな体に生んだなんて、ただの一度も言わなかった。

長沢（裕子と岡村に）これよ、これ。他人に

責任転嫁してるの。

阿部　責任転嫁？

長沢　自分を責めるのがたまらないから、誰かのせいにするの。

阿部　私はずっと自分を責めてきたわ。健康な体に生んであげられなかったこと、思う存分勉強させてあげられなかったこと、友だちと遊ばせてあげられなかったこと、恋のひとつもさせてあげられなかったこと……一日たりとも、自分を責めない日はなかったわよ。俊彦が死んだあともずっと。

長沢　……。

阿部　三年前だった。町で突然声をかけられたの。それはフジミ病院の大部屋で一緒だった人。私、すぐには思い出せなかった。そりゃそうでしょ、二十年以上たってんだから。でも向こうは覚えていたの。ちょうどあの病院の無資格検査事件ことが話題になって、その話のあと、彼女がおかしなこと言ったの。「あの病院で子供の取り違えもあったらしいわよ」って。私の中で今までずっと心にひっかかっていたことの答えがあったと思ったわ。俊彦は私の子ではないんじゃないかって。俊彦は私が必死で育てた大事な子、けれど、違っていたんじゃないか。

長沢　妄想、妄想。

阿部　私、調べたわ。一緒だった妊婦さんたちの居所をつきとめて連絡をとった。でも、確かな証拠はつかめなかったの。中にはしゃべりたがらない人もいた。大沢君江さん、あの人、何か知ってたわ。私にこう言ったの。「昔のことをほじくりかえすのはやめて。私は今のままでいいの」って。彼女は何か知ってる。でも、それ以上は無理だった……あきらめてたの。それがまあ、灯台下暗しとはよくいったもの。自分の担当することになった年寄りがまさか、あのときの看護婦だったなんて。うかつだったわ。

長沢　そう、こっちもうかつだったわ。さあ、

もういいでしょ。気がすんだ？

阿部　婦長さん。あなたもご存知だったんですね。

糸居（長沢に）何のこと。筑前煮の味付けのこと？

長沢　何でもないんです。

阿部　赤ん坊の取り違えのことです。

糸居　やっぱり、赤ん坊ができたの。

長沢　婦長に何を言ってもムダよ。

阿部　まだらボケってやつね。でも昔のことは覚えているでしょ。

小田切　もういいわよ！　そうね、取り違えがあったかも知れない。そういうことにしましょうよ。

長沢　ちょっと、あなた！

小田切　いいじゃない。それで満足するんでしょ。この人も、こっちのお嬢さんも。

岡村　僕は……。

小田切　はいはい、あなたも。

阿部　あなたたちは、何もかもノートにつけていた。全てを記録に残してた。決して捨てたりはしなかった。何十冊ものノート。でもその中に、特別なやつがあった。

小田切　……。

阿部　その名も愛の交換ノート。

長沢　……。

阿部　またの名を天使の閻魔帳。

小田切　それをどうして……。

長沢（小田切に）黙ってなさい！

阿部　どうして知ってるか？　どうして知ってるんでしょうね？

小田切、引き出しに向かう。

小田切　……ない。

長沢　ないはずないわよ！

小田切　ないもの！

長沢、必死にさがす。

長沢　……あなた、盗んだのね！

阿部　何を？

長沢　ここにあった……ノートよ！

阿部　何の？

長沢　そんなことどうでもいいわよ！　返しなさい。返せ、泥棒、返せ！

阿部　だから何を返すのか、はっきり言いなさいよ。

長沢　……。

阿部　盗んじゃないわ。私、婦長さんに借りたの。

長沢　そんなこと……。

阿部　ないって言える？

長沢（小田切に）警察に電話して。

小田切　わかった。

小田切、受話器のボタンを押す。

阿部　読ませてもらったわ。

小田切（電話口で）　もしもし、警察ですか？　こちらはですね。山下町二丁目の……。

長沢（小田切に）切って！

小田切　えっ？

長沢　電話切って！

小田切（電話口で）すみません。もういいです。すみません。

阿部　読ませてもらったわ。足ががくがくして震えが止まらなかった。喫茶店のご主人が心配して、救急車呼びましょうかって。

裕子　それに書いてあったんですか？　取り違えのことが。

長沢　返して！

阿部　取り違え？　いいえ。取り違えなんかじゃなかったの。

長沢　返せ、返さないと！

長沢、みかんを剥くためのナイフを取り上げ、阿部に向ける。

阿部　おやおや、本性丸出し。

糸居　何？　林檎が来たの？　武居さんからでしょ。早く、むいて。

長沢　うるさいっ、ボケババア！　おまえのおかげで。

糸居　あなた、婦長に向かって！

阿部　返してあげるわよ。そんな物騒なものふりまわさなくても。

阿部、ノートを放る。あわてて取りかえす小田切。

阿部　コピー、とらせてもらったから。

裕子　（阿部に）見せてくださいませんか、それ。

阿部　いいけど。卒倒しちゃうよ。

裕子　覚悟はできています。

長沢　（阿部に）あなた、お金がほしいんでしょ。これ、これあげるわ。

長沢、テーブルの百五十万をつかむ。

長沢　百五十万ある。

小田切　何言ってるの！　私たち、シロアリでたいへんなのに！

長沢　コピーを返して。これ、全部あげるから。

小田切　ダメよ！

阿部　いやよ。

長沢　足りないっていうの？

阿部　足りないわ。

長沢　そんなにお金があると思うの。

阿部　知らないわ、そんなこと。

長沢　いくらほしいのよ！

阿部　……ほとほとあきれるわね。

裕子　教えてください。何が書かれていたのですか。母のことも。

阿部　あったわよ。あなたのことも、岡村君のことも。

岡村　僕のことも、ですか？

阿部　そう。

裕子　やはり取り違えがあったんですね。取り違えがあったのに、この人たちは黙っていた。隠していたんです。そうなんじゃないですか？

阿部、首をふる。

裕子　違うんですか？

阿部　違う。

裕子　違うって……。

阿部　取り違えってのはミス。事故。過失。

裕子　そうでしょ？

阿部　この人たちのは過失じゃないの。事故じゃないの。ミスなんかじゃないの。

裕子　ミスじゃない……。

岡村　わざと？

裕子　まさか。

阿部　……。

裕子　そんな……。

岡村　いくらなんでも。

阿部　信じられないわよねえ。私も信じられなかった。これは出来の悪い小説かなんかだって。でもね、ほんとなの。この人たちは赤ちゃんをまぜちゃったの。交換しちゃったの。こっちの赤ちゃんをそっちに、そっちをあっちに、あっちをこっちに。

岡村　馬鹿な、そんな……。

阿部　そんな馬鹿なことをしてたの。

岡村　つまり、僕は、一緒に生まれた誰かと入れ替えられた。

阿部　そういうこと。

岡村　誰も気づかなかったんですか？

阿部　気づいた人もいたわ。さっきの大沢君江さんも。彼女はもしかすると、取り違えが故意に行われたと、感づいたかもしれない。なぜなら……。

裕子（長沢に）なぜ、黙ってるんですか？（小田切に）反論しないんですか？　反論しないのは本当なんですか。

岡村　それでＡＢ型なんだ。

裕子　なぜですか。恨みでもあったんですか？

岡村　母がひどいこと言ったからですか？

阿部　そうじゃないわよね。

裕子　そうじゃなければ……。

阿部（小田切に）面白かったから。そうよね？

裕子　面白い、面白いっていうんですか！

人の人生を……。

阿部　人の人生を、人の運命を変えてしまう。こんな面白いことないんじゃない。面白いわよ。うん、最高に面白い。

裕子　阿部さん……。

阿部　それも実に簡単。（テーブルの上の甘夏を三つ使い、手品をするようなしぐさで）ひょいひょい、ひょいっと。さあ、あなたの本当の赤ちゃんはどれでしょう……まさか、看護婦さんがそんなことをするはずがない。だから、誰も疑わなかった。まさか、看護婦さんが、それも三人もの看護婦さんが関わっていたなんて、想像する方がおかしい。

裕子　三人……婦長さんもですか？

阿部、うなずく。

裕子　私は誰の子供だったんですか。ノートには書いてなかったのですか？

阿部　それは……。

長沢　あなたのうち、お金持ちだったでしょ。その服を見ればわかるわ。確か、お父さん、会社を経営してたのよね。いいとこのお嬢さん。何不自由なく暮してきたんでしょ。いいじゃない。あなたにはいい籤をひいてあげた。子供に親は選べない。こんな家に生まれてきたくなかった。そう思ったってどうしようもない。ろくでもない親に育てられ、ろくでもない人間になったかもしれないのに。あなたは財産家で、教養のある、道徳的な家で育てられた。体も心も健康に

真っ直ぐに育った。肥料をたっぷり与えられて、お天道様に恵まれて大きくなった野菜。みずみずしい果物。なのに不満なの？　あなたはいいめにあったのよ。感謝されてもいいくらいなのに。

裕子　傲慢、何て傲慢！

阿部　子供は親を選ぶこともできないが、親も子供を選ぶことはできないの。育て方次第というかも知れないが、親のできることなんか知れている。親と子は一期一会。出会いなんだ。だがね、それを赤の他人に左右されるなんて真っ平ごめん。それもあんたたちみたいな人に。

裕子　神様みたいな気分になっていたんですか？　人の運命をどうにでもできる神様みたいに。

阿部　そんなんじゃないの。ゲームなの。

裕子　ゲーム？

阿部　そう。目的も何もない。ただのゲーム。お遊び。赤ちゃんの入れ替えゲーム。この人たちは、何千、何万という子供の出産に立会ってきた。世話をしてきた。でもね、この人たち、子供が、赤ん坊を好きなんじゃないの。いいえ、むしろ憎んでいたの。赤ん坊も、母親になる女も憎んでいたの。そうよね。

長沢　……憎んじゃいないわよ。憎むなんて感情は持たないわ。赤ん坊なんか可愛いと思ったこともない。だって、生まれたばかりの赤ん坊なんて、みんなサルよ。ただの醜いサル。これが月足らずだったりすると、尻尾のないしなびたネズミよ。可愛いなんてものじゃない。そりゃ、二、三か月もすれば人間らしくなって、見た目もましになるかもしれないが、そんなの、私たちは扱うことはない。べとべとの汚い、くにゃくにゃのたよりない、そのくせぎゃあぎゃあとやかましい。そんなものが可愛いはずはないでしょ。だから好きでもないかわりに、憎んでもいない。

裕子　……。

小田切　憎んじゃいない。憎むなんて感情は持たないわ。妊婦が美しいなんて思ったことはない。パンパンに腹ばかり膨れた妊婦なんて、みんな樽よ。ただの不恰好な樽。これがよたよたと蟹股で歩いているのを見ると、後ろから蹴飛ばしたくなる。美しいなんてもんじゃない。そりゃ、産み終えればすっきりするかもしれないが、そんなの、私たちは知らない。股座おっ広げて、泣きわめき、目をむいて歯軋りし、汗まみれ糞まみれ血まみれになってやっとこさ、どろどろのやつを吐き出す。そんなものが美しいはずはない。だから憧れもしないかわりに、憎んでもいない。

裕子　じゃあ、なぜ。

長沢　なぜ？　なぜかしら。毎日何千万、何億というお金にふれている銀行員は、それがお金という感覚が無くなるっていう話。それと同じなのよ。毎日毎日、来る日も来る日も股座から子供を引きずり出す単純作業。それが生きている人間だなんて感覚が無くなってくる。それがその後どうなるなんてこと、興味ないのよ。

阿部　興味がない？　それは嘘だわ。

長沢　……。

阿部　あんたたちは細かくノートにつけていた。そして、あんたたちがした行為が、あんたたちが動かした運命がどういうふうに展開したか興味津々。そうじゃない。ただ、赤ん坊を取り替えるだけじゃつまらないわよ。その子がどんな人生を送るか、陰で見てるの。そしてあんたたちは、ほくそえむの。「ほんとは違うんだよ。あんたはそうなるはずじゃなかった。違う人生があったんだ。それをかえてしまったのはわたしたち、わたしたちがほんのわずか手を動かしただけでかわってしまったの。ああ、何て素敵……」

長沢　人の人生になんて……。

阿部　何人ものお人よしがあなたたちに年賀状や盆暮れの挨拶をするようになった。赤ん坊の写真付の葉書を見て、あんたたちは大笑いしてたんでしょ？

裕子　なぜですか？　人の人生を弄ぶ事がそんなに楽しいのですか？　婦長さん、なぜ止めなかったんですか？

長沢、小田切、笑う。

小田切　婦長が始めたのよ。

裕子　婦長さんが。

小田切　やさしい顔してね。平気な顔してね。新生児室で。にこにこしながら、こうやって。（甘夏を使って、とりかえるしぐさ）

長沢　信じてもらえないかも知れないけど、それに気づいたわたしたちは、こうやって……（元に戻すしぐさ）。

小田切　元に戻したの。

長沢　気づかれないように、そっと。

小田切　でも気づかれてたの。

長沢　それでこの人は、こうやったふりをして（甘夏を使ってとりかえるしぐさ）……実はそのままに。

小田切　てっきり、こうなった（とりかえるしぐさ）と思ってたから、こうしてしまった。（とりかえるしぐさ）。

長沢　結果的に、この人と同じ事をしてしまったの。それからはもうこの人に逆らえなくなった。

阿部　きっかけはそうかもしれない。でもそのうちに楽しむようになった。違う？

長沢　ミイラ取りがミイラに。

阿部　楽しんでいた。

長沢　そう。そうだわ。年をとるに従って、何も生み出すことのできない自分に苛立ちを感じてたわ。いろんなことをして、まぎらわそうとしたけど、ごまかそうとしたけど、ダメだった。ぽっかりあいた穴を埋めることなんてできなかった。でも、あれ

は違う。あれをやるときの恍惚、快感は何もかも忘れさせてくれる……（阿部に）これでいいの？　これで満足？

裕子　ひどい、ひどすぎる。

小田切　加担したのは私たちだけじゃない。

裕子　まだ他にもいるんですか。

小田切　母親の中にも、取り違えを知っているものはいたわ。知っていて黙っていた。

裕子　自分の子が人の子と取り替えられたのに黙っているなんて。

小田切　いるわよ、いるの。黙っているだけじゃない。自分でやるのもいたわ。

裕子　嘘です。

小田切　嘘じゃないわ。さっき血液型の話が出たけど、（裕子に）あなた、もし、あなたの産んだ子が亭主の子じゃないってわかったらどうする？

裕子　……。

小田切　浮気相手か、前の男か知らないが、生まれてみなけりゃ、どっちの子かわからないってこともあるの。

長沢　だらしない女がいるのよ。

裕子　浮気がばれないように、他人の子と交換するっていうんですか。

小田切　そういう例もあるのよ。

裕子、阿部をうかがう。

阿部　……。

岡村　母は、母の場合は……男の子がほしかったということなんでしょうか。もし七人目も女の子だったら、そういう気になるんでしょうか。

裕子　岡村さん。

岡村　それなら、僕の血液型の理屈も通る。母がよその人の赤ちゃんだった僕を……だってうちの母が男と女を間違うことはありえないでしょ……母が自分で手をくだしたのでなくても、取り違えられたことを黙っていたことは確かです。母も父も、

血液型について何の知識もない人でしたし。

裕子　阿部さん、教えてください。私は本当は誰の子だったんですか？

小田切　それを知ってどうするの？

裕子　どうするって……。

小田切　そこへ行って、実は私がここの子でしたって名乗りをあげるの？

長沢　どうなるのかしら。あなたのように疑う人ばかりじゃないわ。何も知らず、何も疑問に思わず、平穏に暮してきた人だっている。彼らはどう思うかしら。（岡村に向かい）この人だって、今日の今日まで、自分が取り違えられた子供だなんて露も思わなかったのに。そのまま、死ぬまで疑わずにいるという人生もあったのに。でも今はもう……。

岡村　そこに、その僕の本当の親の名前もあるんですか？

長沢　知りたいの？

岡村　それは……。

小田切（阿部に）教えてあげればいいじゃない。

阿部　……。

小田切　私は覚えてないけど、そこには書いてあるはず（ノートを指し）。

長沢（裕子に）岡村さん、あなたのお母さんと似ているんでしょ。もしかすると、岡村さんがあなたのうちの本当の子だったかもしれないわね。岡村さんはいいところのぼんぼんだったのよ。そうしたら、もっといい学校へ入れてもらって、こんなケチな訪問販売なんてやってなかったかも。かわりに、あなたが貧乏子沢山の、それも女ばかりの末っ子で、厄介者扱いされて、それでぐれて……。

裕子　やめて下さい！

小田切（阿部に）あなたの子、心臓が悪かったっていったわね。だったら、あなたの子が、俊彦君だっけ、この人の（裕子を指し）

うちの子かもしれないじゃない。お金持ちなんだから、もっといい治療もできたかも知れないね。

阿部　……。

小田切　ああそう、岡村さんがあなたの子かもしれないじゃない。

裕子　よく平気でそういうことを……。

長沢　もういいわ、好きにしなさいよ。どうぞ、警察でもマスコミでも。平気、平気よ、私たち。失うものなんて何もないもの。くどいようだけど、私たちを責めることはできても刑務所に送ることはできないの。それより昔の話をほじくりだしたあんたたちが恨まれるわよ。

小田切　そうそう。

阿部　……そうよね。

裕子　阿部さん。

阿部　この人たちの言うとおりだわ。今さらどうしようもないもの。

裕子　私はいやです。本当のことを知りたいんです。それに、この人たちを許してしまっていいんですか？　こんなにひどいことをしたのに、何の罰も。

阿部　……もう罰を受けてるわ。

裕子　えっ？

阿部　私たちが何もしなくても、もう罰が下っているの。

小田切　何を言ってるの。

阿部　気づいていないだけでね。

長沢　悔し紛れ。

阿部　あなたたち、じきに死ぬわ。

小田切　そりゃ死ぬわよ。もういい歳なんだもの。百まで生きるとは思わないわ。生きたくもないし。

阿部　苦しんで死ぬの。

長沢　あなた、お医者さん？　占い師？

阿部　うんと苦しんで。

小田切　何で苦しまなきゃいけないのよ。

阿部　教えてほしい？

小田切　参考までに（笑）。

阿部　砒素中毒。

小田切　何ですって？

長沢　砒素？

小田切　砒素って言ったの！

裕子　砒素。

岡村（裕子に）ひそって？

裕子　毒物の。ほら、和歌山カレー事件の。

岡村　ああ、あれ。シロアリの薬にも入ってるやつですね。

阿部　看護婦さんでもちょっとわからないでしょうね。婦長さんの足、それ、じきに壊疽を起こすわよ。それにあんたたちの肌、黒いのと白く斑になったのと、それ、ただの老人性のものと思ってるでしょ。

小田切　何だっていうのよ。

阿部　砒素白斑黒皮症。慢性砒素中毒の典型的な症状よ。

長沢　いい加減なこと言うんじゃないわ。

阿部　他にも、いろんな症状が出てるはず、胃腸障害、倦怠感、めまい、息切れ。

長沢　……。

小田切　あなた、あなたが盛ったのね！　あなたがつくった食事の中に。

阿部　残念だけど私じゃないわ。あなたたちのやったこと、もっと早く知っていたら盛ったかもしれないけど。忘れた？　「体の調子が悪いみたいだから、一度、病院で調べてもらったら」って、私、言ったわよね。そうしたら、「自分の体のことぐらいわかるわ。何よ、素人のくせに。私たち、医療関係者よ」って、せせら笑ったわよね。それでもお節介の私は本で調べてあげたの。まさかと思ったわ。ここは井戸水があるわけでなし。砒素中毒なんて想像すらできなかった。でも、これで納得がいくわ。やっぱり、あんたたちのは慢性砒素中毒。

長沢　誰なの、誰がやったか、あなた、知ってるの！

阿部　きまってるじゃない。あなたたちにひどいことされた人たちの誰か。もっとも容

疑者は大勢すぎて、特定することなんてできないんじゃない。もしかすると、一人じゃないかもね。

小田切（長沢に自分の肌を見せ）これ、本当にそうなの？

長沢、家庭の医学事典を取り出す、ページを繰る。

小田切　ねえ、ちょっと。

長沢（苛立って）今、見てる！

小田切　そうなの？

長沢　……。

小田切　そうなの！

長沢　……。

小田切　そうなんだ。

長沢　……わかった。

小田切　何が？

長沢　これよ（宅配便の箱を指す）。

阿部　正解！

裕子　阿部さん。

阿部　この人たちがもらっていたお中元やらお歳暮やら。これ、みんな、昔、世話した妊婦さんからなの。彼女たちの中に、この人たちが何をしたかつきとめた人がいたのよ。でも告発することはしなかった……そうよね、できなかったのよ。でも。

岡村　でも。

阿部　この人たちを許さなかった。

裕子　それで砒素を入れた……。

阿部　少しずつ長い時間かけて……よかったわ。この人たちケチだから、わたしにお裾分けなんてただの一度も言わなかったの。分けてもらっていたら、私も危なかった。

（岡村に）岡村君、あなた、大丈夫？

岡村　はい。でもお茶を一杯。

裕子　私も。

阿部　お茶は大丈夫よ。

小田切（長沢に）これ、砒素の毒のせいなの。もうじき死ぬの？

長沢　……。

阿部　もう歳だから、死ぬのなんて怖くないんでしょ？　どうしたの、ここへきて命が惜しくなった？　居直ってたくせに。

長沢、糸居が食べている甘夏を奪い、床にたたきつける。

糸居　何、するの！　もったいない。

阿部　もう遅いわよ。

長沢　……

阿部　砒素を入れた人を調べようにも、証拠はみんなおなかの中。

小田切　死ぬの？

長沢　死なないわよ、死ぬもんですか。死んでたまるか！

糸居　誰が死んだの？　何号室？

長沢　うるさいっ、うるさい、うるさい。うるさいんだよ！

長沢、糸居の肩をつかんで揺する。嫌がって喚く糸居。裕子が止める。

長沢　こいつが、こいつがあんなこと始めたから、こいつがノートを見せたから、こいつが……。

裕子　全て婦長さんのせいにするの？

長沢　私たちを仲間に引きこんで、私たちをずっと縛ってたんだ。支配してたんだ。私にも結婚話があった。けれど婦長は、この女は、にやっと笑って、「それはよかったわね」……できるもんならしてみなさい。あんたのしたことをしゃべってあげる。一人だけ幸せになるなんて許せない。口には出さないが、顔をみればわかる。恐ろしかった。できなかった。（小田切をさし）この人は能天気だから結婚したわ。でもすぐ戻ってきた。婦長が陰で何をしたのか、私にはおおよその察しはついてる。

小田切　……。

阿部（裕子に）どうする？

裕子　えっ？

阿部　どうしたい？

裕子　どうするって……。

阿部　あなたは、ほんとうのことが知りたくてここへ来たんでしょ。

裕子　私は……。

間。

裕子　私は、もういいです。

阿部　いいの？

裕子　何も変わらないみたいだし、変えようがないみたいだし。

阿部　岡村君は？

岡村　僕は、僕はきっと血液型、間違ってると思います。普段から優柔不断なところが親父にそっくりだって、姉ちゃんたちに言われてますし。

阿部　そう（笑）。

岡村　阿部さんは？

阿部　とりあえず、俊彦のお墓参りに行く。

岡村　コピー、本当はとってないんじゃないですか？

阿部　そう思う？

岡村　ええ。

裕子　……あ、あれ（糸居を見て、急におびえた声）。

全員、糸居に目をやる。

長沢　婦長……。

小田切　婦長さん、何してるの……。

糸居、テーブルの上に並べておいたお札を口に突っ込んでいる。

小田切　ちょっと、やめて。婦長さん！　それは違うの、それはダメ。

必死に止めようとする小田切。争う二人。
札が舞い上がる。

小田切　やめて、やめて。喉に詰まるわよ！
死んじゃうわよ、やめて！

正気を完全に失い、うなり声をあげ、抗いながらも札を口に入れ続ける糸居。
その場に座り込み、顔をそむける長沢。
阿部、岡村、裕子、ただ呆然。
暗転。

3

舞台中央に篭。
黒衣の女１、２、３。サッカーボール大の赤い毛糸玉を抱いている。

女１　へその緒、切りました？
女３　はい、ちゃんと。
女１　チンチン切ってはだめよ。
女３　ヒヤリ、ハッとは日常茶飯事ですが、幸いいまだ事故にはいたらず。
女１　消毒しました？
女２　はい、ちゃんと。
女１　双子さんに番号つけました？
女３　番号いるの？
女１　双子は順番で揉めるのよ。だから、ちゃんと、「その壱」、「その弐」って、黒いマジックで書いとくの。
女２　生まれていきなり黒魔術をかけられるわけね。
女３　色が違ったり、柄が違えば簡単に見分けがつくのに。ほんと、七面倒くさいったらありゃしない。
女１　それにしても今日は豊作。ほうねん、マンさーく。

女３、篭の中を覗こうとして、毛糸玉を

中に落としてしまう。

女３　あら、しまった。

女２　おっちょこちょい（笑）。

女１　うっかりやさん（笑）。

女３、篭の中をさぐる。よろけて、篭を倒してしまう。

中から、同じような赤い毛糸玉が転げ出て、舞台の上に散らばる。

驚いた拍子に、女１、２も毛糸玉を落とす。紛れて、どれがどれなのかわからなくなり、大騒ぎ。転がる毛糸玉に足をとられるわ、蹴飛ばすわ……。

何とか、毛糸玉を篭に戻す。

女１　それでは、いつものガラガラ。

女２、３　ポンッ！

女２、女３が、大きく揺すってから篭を逆さにすると、なぜか赤でなく、白い毛糸玉が三つ出てくる。

ブーン、ブーンと糸繰車の管巻の音。

三人の女、ゆっくりと黒衣を脱ぐ。その下には白い看護婦の制服。ナース帽をつける。白い毛糸玉を抱く。

女３　同じ日、同じ場所で生まれた子供たちはみんな二卵性の双子なの。そっくりじゃないけれど、二人じゃないけれど双子なの。へその緒がまるでステレオの配線みたいにごちゃごちゃで、どことどこがつながっているやらいないやら。運命の糸で結ばれていたみたいな小さな人たち。ごめんね、その糸をこんがらかせたのは私たちなんだけど。あげくにそいつを適当に切ってつないで、辻褄合わせしようとしたのは私たちなんだけど。

女２　だから、せめてもの罪滅ぼし、ノートはしっかりつけておきました。今日一日の

あんなことも、そんなことも、こんなことも。（小声で）あの子がほしい、あの子じゃわからん。相談しましょ、一、二、三……私たちの仕事はそれがすべて、私たちの仕事はそれで終わり。

女１　はーい、よろしいですかあ。田中さんの奥さんの赤ちゃん、出まーす！

女２、３（声を揃えて）　はーい、慶んで！

管巻の音、さらに大きくなり、突然、赤ん坊の泣き声が混じる。

火のついたような赤ん坊の泣き声。

天井からはノートをちぎった紙ふぶき。

了